

2025年9月2日

amu定例～文字起こし

00:00:00

安部和音: あ、あ、はい。あれ? 家帰った。うん。

高橋英信: 帰った。よく考えたらカメラが家にしかなかった。携帯でもいいんだけど。

安部和音: よいしょ。あれ? 竹林君、あれ

高橋英信: もう1個の部屋入ってるかも。部屋が2個あるな。

安部和音: なんか招待し直したくね。

高橋英信: カレンダーに勝手に入れたよ。

安部和音: 許可されてないな、これ。これやべ、50ページしか読めませんでした。

高橋英信: 今今います。

安部和音: いや、もう無理やろ。収穫がでかすぎる。でもえ、リンク送ってくれ。早。こうやって強化すんね。えー、はい。

竹林ユウマ: した。え、あれさ、あれなんだつけ? うん。なんかそんな記憶あるな。はい。メールアドレス。メールアドレスどっちに送ってもらったんだつけ俺。

安部和音: すいません。お世話になっております。

高橋英信: する。

安部和音: 呼んだよ、俺。竹林君だいぶ前、前の停例か。え、なんか多分承諾されてない?

それ老

00:03:51

竹林ユウマ: そっちか。あ、それだ。

安部和音: ちゃ、ええっと、何だつけ? コピー

竹林ユウマ: できた。

安部和音: はいいか。

竹林ユウマ: さて

安部和音: ちょっと待って。フィグマ。

高橋英信: これはい。

安部和音: えっとオッケー。えっと、ま、私からはなんですが50ページしか読めませんでした。

竹林ユウマ: うん。はい。はい。はい。

安部和音: 50ページしか読めませんでした。

竹林ユウマ: おい。

安部和音: なんで正直停例をちょっともう1回やりたい。

竹林ユウマ: うん。うん。ああ。オッケー。オッケー。い、あれね、最後ら辺が面白いんだよね。あのさ、エッセが面白いんだよな。あ、

安部和音: しょ。

高橋英信: す

安部和音: あ、そなん。ちょ、エッセ読めるぐらいある。

竹林ユウマ: 5分ぐらい。あの、タクラムのそうそう。

安部和音: タ克拉ムの本読もうかな。

竹林ユウマ: ディレクターがディレクターエンジニアがエッセで何書いてあるか忘れた

安部和音: おお、なるほどね。一言目から好きだわ。華に花咲を驚くより正規に花咲を驚けて。

00:06:17

安部和音: あ、お前の言葉じゃないんかい。ええ、竹橋君画面共有してくれない? ええと、ちょ、全画面でウォーター店って調べて

高橋英信: 次

竹林ユウマ: く。はい。

安部和音: 2121デザイン

竹林ユウマ: うん。邪魔すぎやろ。このページだよ。

高橋英信: ど

安部和音: それはさ、振る舞っていう作品とかが見れるんかな? ありそうだよな。

竹林ユウマ: ああ、でも白で出てくんじゃ。うん。

安部和音: そもそもウォーターっていうのはさ、もう基本的にはもう水っていうコンセプトただけなのかな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: だけだね。

竹林ユウマ: いやあ、だけじゃない。

安部和音: なるほどね。そこにこういろんなアーティストが解釈し感じのふん。

竹林ユウマ: うん。うん。水だけっぽい。

安部和音: ふん。

竹林ユウマ: どう? 50ページ読んだ感想なんか結構あすいません。

安部和音: ちょっとF呼んでる。え、読み終わったやついる。え、マジ早いんだよな、こいつ。

竹林ユウマ: え、

安部和音: 火でこいつマジ早いんだよね。意味とかないんかなみたいな感じの読み方するから。

00:08:30

安部和音: え、理解できてんならすごいよな、それ。

高橋英信: そう。

安部和音: なるほどね。基地の道かね。基地の道かね。

竹林ユウマ: ん? うん。

安部和音: 基地の道かっていう言葉を使ってる。

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: ちょ、全然覚えてないな。今その本手元にないんだよね。持ってくれればよかつた。家、そう、そう、そう。家の近くにあるカフェ。

安部和音: どこにあんだよ。あ、お前今何? カフェかなんかできるんだ。ミーティングって。

竹林ユウマ: わかんない。出になるかしたら。

安部和音: そんなのやばえ。

竹林ユウマ: ん、切れるでしょ。

安部和音: えぐい。Wi-Fi の人いない? 負けしてないこいつずっと本読んでる。関係動いてないから。あのよ、読めてないわ、これ。

竹林ユウマ: あ、きの道かね。はい。はい。はい。

安部和音: まあ、水の振る舞いっていう作品がの道っていうものがテーマだったっていう話だけど、水っていう基地のものを未知な未知として捉える。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。ふん。ふん。

00:10:25

安部和音: 自分の頭で捉えることによって本当になものになるよねっていうか、そのなんて言うんだろう、知ってるふりをしてるよね。俺たちは水についてみたいな話なのかなっていう。

竹林ユウマ: ああ、でもそうじゃない。前提を的な。

安部和音: うん。喉乾いた時に飲むのとかさ、雨が降った時にとかさ、なんかそういう表層的な理解しかしてないよねのガチ。そうだな。タクラムってでもそうだよね。なんかすごいニュートラルなものをさ、こうなんて言うんだろうな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。いや、そうだと思う。いや、なんかいかにもたらむっぽいよね。うん。

安部和音: 味方によってはこうグロテスクだったりとかなんかそういうな、すごい小切れにそういうさ、えぐいことをやるイメージがあるな。宝む。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: うん。そうだね。うん。なんかやっぱりもうすでにある頑固たるかこたる常識を

デザインエンジニアリングでまた逆引きして新しいものを作るみたいな組織

安部和音: わ、Jリーグのブランドやってんのかっこよ。

高橋英信: あ、はい。

安部和音: かっこよ。

竹林ユウマ: すごいな

安部和音: このロゴかっこよくできんのすっげえな。

00:11:51

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: おお、なるほどね。すげえな、これ。

安部和音: え、すげえな、今。

竹林ユウマ: かけ。ああ、でもなんか思想は薄そうだね。うん。

安部和音: 最初最初だけ好きじゃなかったわ。ビビットフェアプログレッシブ。まあね。

高橋英信: うん。

安部和音: うわ、Jリーグのとモナとか作んの大変だろな。結局こうこれだよね。この色をいっぱい使うっていうか色をいっぱい使うからてかな、何にもよらないようにしないといけないもんな。普通にエコひ機でさ、サカチどこにどこの

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。そうだな。

安部和音: FCにもよれないっていう。

高橋英信: オ

竹林ユウマ: うん。確かに。いや、すごいな。これやばすぎでしょ。

安部和音: あ、でもタクラムの人は結構ああ、なるほどね。ん、あのね、グリッドデザインにそれを見たとこ。

竹林ユウマ: あ、おお。会できた。いや、俺もグリッドで。うん。グリッドね。

安部和音: 秀はこの前あのルナにグリッドデザインを学びました。

高橋英信: 教えてもらいました。うん。

00:13:35

高橋英信: 初歩的なこともあつ

竹林ユウマ: 俺もちゃんとめちゃめちゃ勉強したわけではない。あのグリッドシステムのさ、めちゃめちゃ有名な本あるじゃん。あの赤い

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 1万2000ぐらいで売ってるやつ。あれむずいよ。俺も買ったけどね。うん。

安部和音: うん。うん。それを読めって俺は正直思ったんだけどむずいのかな?やっぱむずいんだあれ。

竹林ユウマ: あの、英語、英語のやつ買ったから読むのめっちゃ時間がかかる。

安部和音: さんうん。でバカじゃない?え、日本語出てないことあんの?あんな有名な本?え、みんな英語で読んでんの?本当に?

竹林ユウマ: い、あれ日本語出てたっけ?あれ日本語出てたっけ?なんか日本語のやつき、あれめっちゃなんかプレミア価格みたいのついてなかったけど。

高橋英信: 終わりじゃん。

安部和音: え、さすがにあるでしょ?いや、全めちゃめちゃあるやん。グラフィックデザインのために言ってるやん。

竹林ユウマ: ほんまや。しかもこっちの方が安い。

安部和音: あ、そう。こっち、こっち、こっち。俺が知ってんの?こっち赤いイメージなかった。

00:14:39

竹林ユウマ: これだよ。これ。これラストシステム。日本語の方が安いの。うざいな。ん?ラブ入ったんじゃない?あ、そうなんだ。

安部和音: ええ、かっこよだって。

高橋英信: ええ、かっこいいすけどね。

安部和音: それ、それこそあれじゃないの?和分使ったデザインとかもとろ入ってんじゃないの?ことはとどろ差し絵で入ってたりするんじゃないの?和分のデザインが日本語版とかだったらだとか書いてるよ。

竹林ユウマ: いや、わからんな。日本語はね。タイグラフィーな何だっけな?あれんだっけ?日本語和分和分はね、もっといがあるんで。あ、これだ。グラフィンドブックっていう本がね、これめっちゃいい。これ割とその和分もモラ的にどうやって文字みしたらいいかとか書いてある。うん。もうこれ辞書みたいになってんだよ。髪ペラっぺらで。うん。自転みたいな。面白い。

安部和音: はい。はい。はい。はい。はい。はい。でもめっちゃ美しいな、このカーニング。うーん。うなん。うん。

高橋英信: うん。

安部和音: そうそう。タイプグラフィーって言うんだよね。文字、文字組でデザインすることでグラフィーはマジでグラフって検索するだけでめっちゃかっこいい。

00:16:12

安部和音: 本当に。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 今のデザインのかっこいいがやっぱりタイプグラフィーを搜集かなりしてるしてして数十年ぐらいしてるデザインだからま、ずっとかっこいいデザインでヒガやってるあの文章使用書とかさ、ブランボードとか作る時やっぱ文章の文字組にめっちゃ困ってたじゃん。

高橋英信: うん。あった。

安部和音: ま、それはタイプグラフィーで解決する。学べばかり100年ぐらいあれじやん。

竹林ユウマ: 結構歴史はもっと古いじや。もう活版印刷の時とかぐらいからあるんじゃない?うん。

安部和音: タイプだったらさ、メリッサパイロンアナザーグラフィックエナザアナザグラフィックだ。

竹林ユウマ: うん。誰それ

安部和音: えっとな、これ。これトップページ。そうそう。

竹林ユウマ: ります。

高橋英信: おお。

安部和音: それ1番下だったらグラフィックデザインの1番最初に行くタイプグラフィーか。

竹林ユウマ: どういうこと? ああ、歴史の自系列で並んでんの? うん。

安部和音: タイプの怒りだ。それがだからうん。最近のトレンドはないかあるかな? わかんないけど俺そのサイトは結構なんかずっとお気に入りに入ってるわ。

竹林ユウマ: あ、うん。

安部和音: ま、歴史的にはもっと古いかもしないんだけど、割となんかこういうデザインにおいてのこう辞書みたいな感じ。

00:18:06

竹林ユウマ: いいね。うん。うん。うん。うん。うん。うん。オッケー。さて、どしましょうか。

安部和音: はい。はい。今もう読んだけど、最後の方何言ってかわかんなかった。ま、いいやい、ま、一旦そう、俺からしたら、あ、俺からしたらっていうか、俺がメモったのが

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。ま、でもそうね。うん。

安部和音: 50ページまででもったな、これ。それで俺も読む。うん。

竹林ユウマ: 知るものは言わず、言るものには知らず。

高橋英信: こうん。

竹林ユウマ: 全ぽいね。もうまさに全そのものだね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 料理解主義とかはなんか全かそのなんて言うの? 前はその入してから数年間は喋っちゃダメたいなのなった気がする。

高橋英信: うん。

安部和音: あ、でもうん。うん。

高橋英信: ごめん。

安部和音: え、それ、それは全なんだ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ふん。うん。その価値ちゃう。

安部和音: あのさ、その1個下のさ、詫びサビの意味を曖昧にしつていうところがめっちゃ好きだったの。

00:19:43

安部和音: まず1個目。これめっちゃ好きですね。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。うん。

安部和音: で、まずその詫びサビっていうものを本人たちは体型的に説明ができるんだよ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 多分やってた人達って茶のとかをやってた人達っていうのを浴びができるんだけどそれを家元性にしてほ外にはもらす言葉で

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 漏らさないってことでもちよこちよこ見せて興味を書き立たせるっていうマーケティングをしてたっていうのが面白いなと思っててそうでなんか多分それとこう秘伝のタレ

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。ま、こつから先は有料コンテンツだよっていうね。うん。

高橋英信: うん。

安部和音: をあの言わないことを続けていった結果多分いろんな周りの人が解釈詫びサビを解釈して言葉にはできない何かになっていったってのが結構あるのか

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: なと思って昔は言葉にできた可能性があるなって思った。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

00:20:54

安部和音: 昔これを詫びサビっていうものをの怒りにこの家元性をやってた人々はもう完全言語化でマニュアルもあった可能性がある。

竹林ユウマ: うん。まあ、なるほど。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: けどなんかこうぼやけていったみたいなのもあるのかなとか思ったりとかしながらもでもとりあえずその曖昧にしてその価値を消費者にチラチラと見せるってめっちゃおもろいなと思ってホテルでもなんかそういうのは使えないかなと思ってメモったでスティックとかはメモメ

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: で、ま、苦業者が自らに貸したなんこれ陰性陰性と自発的製品が先進性の豊か祭のチャンスと考えられ始めたのであるっていうのがま、なんか

高橋英信: あ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 生活の尊さとかなんかこう最近の服さハイパー・ポップとかさなんかそういうのにちょっと似てるなと思ってなんて言うんだろうな。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: あ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: まあ、なんかその詫びも鏽もさ、元々貧しいを意味するような、貧しい、寂しいを

意味するような用語をそこにそのちっちゃい出来事に対してこうチャンス、豊かさっていう考え方をすることによって、えっと、それを美しいB美学にすっていうなんかこう美学としての価値を見い出していくっていう

00:22:24

竹林ユウマ：うん。うん。

安部和音: のがあの生活の尊さと似てるよねって思って。

竹林ユウマ: 生活のさ。

安部和音：うん。生活の届さっていうのはなんかインリビングみたいな丁寧な暮らしみたいなのってのが結構これいつ俺はなんかマイヘアイバッとかも結構近いとかまでも

竹林ユウマ: ああ、丁寧な暮らし的だね。うん。ああ。

高橋英信: うん。

安部和音: 本当に究極究極に似てるあの詫びサビじゃんって思うのはあのフジファブリックとかうん。

竹林ユウマ：うん。フジファブ。ああ、ま、でも俺、俺もね、それ結構初めに読んだ時に思ったんだよね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: あの、詫びさびって一見日本の中でもすでに失われつつある文化みたいな捉え方はできるんだけど、ま、なんか別の形に発展したっていう見え方

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ：もできるなと思ってて、ま、それこそさ、ま、かさん分かると思うけど、ギターロック界隈はこの表現がすごいうまいなと思ってんだよ。

安部和音: うん。うん。うん。うん。

高橋英信：あ。

安部和音: そうだね。

00:23:30

竹林ユウマ: 例えばあ、なんかAIに置かれた相とかさ、一見そのなんて言うの?うん。

ま、表できない。そう、そう、そう、そう。うん。うん。うん。うん。でもそうだと思う。うん。

安部和音: まあ、そう、そう、そう。うん。なんかでもさ、ものすごいじゃん、ギタ一口って。だけど、だけど精神性精神日本人の精神なんだろうなっていう。

高橋英信：はい。

安部和音：うん。だからこれってさ、多分なんかこの歌詞部屋に置かれたい限ってさ、英語県の人たちが見たら単純に悲しいで終わるんじゃねえかと思ったん。うん。さあ、サードで

終わるんじゃねえかっていう。

高橋英信: あ

竹林ユウマ: それをすごいと思ってすっげえ昔にその Twitter がまだ Twitter の時代に投稿したんよ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ：それをそうするとそれ投稿した佐野さんにもう反発リプライが飛んできたの思い出した。

安部和音：うん。そうなんでなんか伝わんなかつたんだろうな。

竹林ユウマ：うん。

00:24:38

竹林ユウマ: いやな何て言ったっけな。覚えてないな。なんかっけな。

安部和音: まずあまあでもお前あれじゃん。言い切っちゃう癖あるじゃん。

竹林ユウマ：うん。まあ、日本のそういう風のデザインはあくまでその独自性があって、その一見他の国外から見たら特に見えるけど、その国外は国外でなんかその特色があるその船のデザインみたいのが存在するから別にこれは悪さびじやないんじゃないみたいな反論だった気がするけど。あ、笑。

安部和音: がでかいじやん。それでかすぎでしょみたいな話だと思つ俺も結構思つてたもん。

竹林ユウマ：うん。マジで？うん。

安部和音：ま、でもそのあれじゃんね。ただ大人になつたら分かってくことみたいな感じだよな。それって間違つてない方向性は。

竹林ユウマ：うん。うん。ま、でもそうだよね。

安部和音：んであ現代の日本人が詫びと口にする時彼らは鑄のことについているの結構面白いなと思った。

竹林ユウマ：そう、概念を口にする時はやっぱりどっちのニュアンスも1つの言葉に内放されてるけど、ま、でもそれを物とか建築とか内装と

安部和音: うん。

竹林ユウマ: かなんか物質で表現する時は詫ビは表現できたけど鑄は表現できてないとか、ま、逆もしかりでなんかそういうパターンは存在するかなって思つ

00:26:04

安部和音: うん。うん。

安部和音: うん。そうだね。詫びってむずいなって俺も思った。うん。あ、そうそうそう。なんかさ、写真の切り取り方だなとかさ、瞬間の撮影いつタイミング押すかでしかない気がした。錆びって。うん。

竹林ユウマ: これとかさ、ま、一見寂しさはあるように見えるじゃん、これ。詫びさは別に存在してないように見える。俺礼は。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。ま、その、そのな、何それ？ そのぶら下がってるというちょっとワービーじゃない？ でも、ま、でも装飾だからな。

竹林ユウマ: あれ？ 何が下がった？ ああ。あ、そっか。ま、大前提としてその不可欠な装飾はしないっていうルールがあるもんね。うん。なるほど。

00:27:08

高橋英信: ああああ。

安部和音: これが例えれば装飾じゃなければ詫びかなとかは俺は思う。そう、不可欠な装飾。じゃあ不可欠な装飾を入れた時にむちゃくちゃかっこいい詫びサビになるんじゃないかって俺は思ったんだよ。そういうわけで不可欠な装飾というのは何だろうかっていうのを話はしたいなとは思ったの。

高橋英信: はい。ない。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ま、そもそも装飾自体がこのあれなんじゃない？ 装飾全般が別に不可欠なんじゃない。

安部和音: えっとけうん。

竹林ユウマ: 装飾っていうものの何かを、ま、何かもにテクスチャーだったりなんかを意図的に加えて付け加える前の状態よりもいい状態に見せようっていう意思が絡んだ時点でそれはもう必要不可欠ではないものを打足してるってい

安部和音: うん。うん。

高橋英信: ま、言ったら建築みたいな感じ。

竹林ユウマ: あ、でもそうだね。うん。うん。うん。うん。ふんふんふんふん。そうね。

安部和音: でもそのを超える装飾って本当にないのかっていうところを追求したら新しくね、なんか、あ、これ意味があるじゃん、この装飾はってなったら超かっこいいなと思った。ま、これは別にこのホテルの話じゃなくてね。

高橋英信: あ。

安部和音: で、ま、あとは、え、うん。

00:28:47

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: ああ、でもあれじゃない？ 例えば、ま、ホテルに限ったら、えっと、なんかその職体がその機能の工場第1の目的

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: としたものなら、ま、それは別に合理的だし許される範囲な気がする。例えばサインとかさ、矢印とかさ、あれって装飾にもなるけどさ、第一の目的はその誘導っていう機能じゃん。なんかなんかそういう領域は割と表現しやすいんじゃないかなと思った。例えばサインをもうボコボコの木で作るとか。うん。

安部和音: うん。うん。

高橋英信: ああ、これありなんか。

安部和音: まあ、うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: うん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。ふんふんふふん。

竹林ユウマ: そういう感じか。

安部和音: ま、意味を持たせる装飾にしましょうみたいな話なんだろうな。多分装飾をやりたい時は意味が必要な。

竹林ユウマ: うん。うん。ま、でもそうだと思う。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: うん。

安部和音: それって例えばなんかさ、矢印だったらさ、矢印の棒の部分がさ、ぐにやってしてるとするじゃん、例えば。

00:30:01

安部和音: そしたら、あの、右に行けばいいんだけど、右に行こうとしたら実はちょっと道くねくねしてたみたいな。おしゃれだなって思うじゃん。それって例えばそういうの見た。なんかそういう周一さとかなのがなみみたいな。ま、考え抜けて話するな。だからうん。うん。うん。

竹林ユウマ: はい。うん。うん。うん。うん。うん。いや、そうだ。いや、だからうん。ま、言ったらそのちゃんと合理的であれば良くてうん。合理的にその合理性に基づいたものであればよくてそうでないならそれは打つていうああ、なるほど。うん。いや、でも俺はあれだな。

安部和音: そうだね。まあ、でもなんか合理性っていう言葉でさ、こうなんかこうまとめちゃうとき、こうつまんなくなっちゃう気がして来てはいる。読、読んでる感じでさ。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: そのもう振り切ったらかっこいいんじゃないかとは思ってる。

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ま、それこそリキみたいにその完全な合理性でその自分の身の動きをさ、最小限に削るみたいなそこまでやり切ったらそのうん。

00:31:14

安部和音：うん。うん。うん。うん。うん。そうだね。それってさ、もはや無意味やん。俺思ったんよ。

竹林ユウマ：どういうこと？うん。ああ、食

高橋英信: あ

安部和音：究極の効率ってえっとだなって思ったんだよね。そういうれば理球はエネルギーの最小限にそういう作をやってたって話じゃん。

竹林ユウマ：うん。うん。うん。あ、そもそもそれをやるなってこと。やる必要なくねってことか。うん。

安部和音：やる必要はまあないじゃん。いや、そうそうそう。それって多分こだわりの部分でこだわりイコール装食だなって思ったのよ、俺。追求とも呼べるんだけど追求とこだわりの差があんまりそこない気がして。えっと、それはこだわりじゃん。

竹林ユウマ：あ、ああ、なるほどね。うん。いや、むずいな。いや、むず、むずいな。どうなんだろうな。

安部和音: で、こだわりイコール装飾じゃんみたいなんなんかうん。

高橋英信: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ま、でも確かにまあ、最小限に削るならそもそもやんなくてよね。めっちゃ分かるな。ま、

安部和音：あ、えっとね、それを究極な、えっと、そういう作法にすることによってブランドバリを高めたんだよ、理球は。

00:32:29

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: うん。うん。

安部和音：あていうものでブランドvalリーを高めるためのそういう無駄なことっていうのは装飾かなと思ったよ。

竹林ユウマ: ああ、なるほどね。あ、でもあはあ、理解した。理解した。

安部和音：うん。だから装飾に近い。だから究極の効率化って装飾であるみたいな俺の中で本当に究極のね。本当に究極え究極の装飾は完全なうん。

竹林ユウマ：あの、究極、究極の装飾はその完全な理性を身まとうことっていう合理性をうん。

安部和音: 究極な合理性。究極な。

竹林ユウマ: 究極な合理性を身にまとうこと。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音：あ、はいはい。そうそうそうそうそうそうそうそうそう。あのそうそうそうそうそう。そういうこと。ミニマトになるじゃん。なんかそエピソードなければさ、何やってんだこいつになるわけじょ。で、それをエピソードとすることってさ、むちゃくちや装飾じゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。はい。はい。はい。はい。ようやく理解したわ。うん。ない空間大劍作りたいと。

00:33:40

高橋英信: あ。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: ちょっと待って。1回思考整理をさしてくれ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: そのために製というああ、そつか。

安部和音: そそうそそうそそうそそうそそうそそうそそうエラルキーかさなんつうんだろう
なんて言うんだろうなんかさっかなんか冷えら歩るきそっかなるほど繋がってる

竹林ユウマ: ブランドうん。

安部和音: 例えはちょっとこれを分かりやすくすると、えっと、俺めっちゃ好きだったけど、イ
エラルキーの存在がない感を作りたいってなった時に、ま、例えばお

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 金がないやつでもできることをやりましょうみたいな話なわけじゃん。お金がない
ことをやるには地元のチャキを使うみたいなっていう話じゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: 装飾のないみたいなさ。

竹林ユウマ: ま、そもそもチャキじゃなくて、あの、液体を入れられる器であれば何でもいい
精神だよね。

安部和音: そそうそう。で、その代わりお金のかからない作法というものはめちゃめちゃ高
級にしようって思ったってことなんじゃないかなと思ってんだよね。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: これ何?

竹林ユウマ: うん。

00:35:30

竹林ユウマ: ああ、だからあ、した。はい。はい。はい。なるほどね。だからそのあ、そうね。
うん。

安部和音: うん。だからこれは矢印がいっぱい増える。

高橋英信: 具体的

竹林ユウマ: 村を削る。あ、村を削るとうん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: そ、一見素な環境で生まれたのに価値を出せるんじゃね。

高橋英信: おと

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。あ、そつか。別にま、豪華なチャキじゃなくても話であれば成立するって

いう。

安部和音: これ矢印がヒエラルキの存在ない着感体験作りたいの1個下に豪華なジャキ
じゃなくてもが入るからでえっと一見

竹林ユウマ: うん。うん。あ、そっか。

高橋英信: うわ。

安部和音: 一見粗悪な環境に生まれたチャキに価値を見出せるんじゃねえが次に来て、
で、で、それで価値を出すにはてなが入って

竹林ユウマ: うん。を出すには

安部和音: で矢印無駄を削る。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: 無駄を削る。えっと、その合理性に、あ、まだからその無駄を削る。で、それを究
極の合理性とブランドバリを身にまとめるということだよね。

00:37:33

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: 多分これもクソかっこいいよね。

竹林ユウマ: マジで狂るったことしてるな。すごいよね。うん。いや、これをよく個人レベルの
試作で思いついたわ。うん。でも確かにでもこの思想はさなんだろうな。

安部和音: うん。ねえ。

高橋英信: うん。

安部和音: いや、そのなのよ。だからこれお金ないんだよね。

竹林ユウマ: まあでも全、ま、前もそうだし、そもそも仏教とかアニメズム的な思想を持ち合
わせてないとまずここに価値があるって見い出せないから。

安部和音: いや、しかもこれでやばいなと思ったのがさ、これを編み出したのがさ、台のあ
のあいつじゃん。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: 針ネズ豊秀吉の下にいる時に思ったことなんじゃん。これはやばいじゃん。

竹林ユウマ: うん。そうだね。確かに。いや、そうだね。アンチ勢だ。

安部和音: 金持ちの金持ちの時にこれ考えのやばくない? アンチすぎるでしょ。存在がもう
ジョブズじゃん。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: ま、でもむしろその金持ち環境の時に身を金持ち環境に身を置けたからこれ
に至れたみたいなどあるよね。うん。

00:38:58

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: だからさ、そうだね。あの粗悪な環境にいる人たちがこれをやつたらただ痛いだけじゃん。うん。その逆張りが成立してるからこそうまくいったみたいなところあるよね。

安部和音: うん。うん。うん。で、それ、それで生み出した理球のこのスタウンスっていうのは貧乏人が真似できるようになったわけじゃん。

高橋英信: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: もうだも超絶鉱石だよね。

竹林ユウマ: うん。このなんかこのフレーム使ってなんかできそうじゃね? うん。

高橋英信: うん。

安部和音: うん。できると思う。マジで。なんか何かを考える時にこのフレームワークはいけると思う。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。ま、もっと抽象的な概念化すれば全然使えるんじゃないか。うん。うん。うん。いいね。

安部和音: ま、今度これなんかもうちよい汎用性の高いフレームワークにしたいの。うん。ある、あると思う。で、どこまで行ったつけ? ああ、次がだからそのここだよね。ビサビのバビサビとモダニズムの違いを図式であったと思うんだけど。あ、左だね。

00:40:13

高橋英信: あ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: さんの左けたんだけど、ま、まずなんか共通としてモダニズムっていうのがあるわけじゃん、多分。

高橋英信: こ

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: で、ちょっとちょっと深ぼったけど、ミッドセンチュリーモダンモダンていうがあるよね。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。センチュリーあれか。ふん。

安部和音: 多分そのことを言ってミッドモダンみたいなこと言ってたけどなんか出てこなかったから調べてたらそうそうでこのこの後ろのバックはミッドセンジモダンの建築家が作ったやつなんだけどそうそうハウスだ

竹林ユウマ: それこそバーハウスとかさ、あの第2次世界対戦直後とかさ、あそこの産業革命の分脈じゃない? うん。大量生産ができるようになりました。このデザインでのところじゃない? うん。

安部和音: そう、そう、そう、そう。でもなんかもうバウハウスよりかっこいいなって思ったんだよな。まず単純にわびさびの方がで好きな理由はまあ今あ、もうちょ左行ってちょこも俺たちいらねえよ。

竹林ユウマ: え?あ、あ、うん。

高橋英信: あ。

竹林ユウマ: はい。どうやって動すの?あ、壊せばいいのか?ならうん。

00:41:43

安部和音: ジャ、ちょっとちょっとどかしといてくれ。わかんない。ま、両方見れる。まあ、好きなのが、ま、まずなんか荒い表面と滑らかな表面だったら洗い表面の方が好きだなと思って。

高橋英信: あ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。しちゃ。

安部和音: 僕結構テクスチャがやっぱ好きで。で、テクチャってなんか滑らかって1個しかないけど洗いてさ、いっぱいあるなって思ってなんかサラサラとかさ、ザラザラとかさ、ボコボコそういういっぱい表現がある

竹林ユウマ: うん。うん。凹凸とかね。うん。うん。うん。

安部和音: よねって思ったから単純になんかモダニズムって結構一角化するじゃん。やっぱバーハウスとかもそうだけどさ、滑らかで工業製品って1個しかなくなってるデザイニング。どこで差別化するかで言ったらなんか色遣いでしか差別化できないっていうのが結構モダニズムの典型的象徴だと思ってたよ。紫じやん、これ。これガチ紫なの。形は普通じやん。たらモダニズムだね。で終わるじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ふん。ふん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

00:42:54

安部和音: だからなんか色でしか表現できないところよりもわビサビのなんかテクスチャも取り入れてるところってのは結構好きだなと思って多分詫びサビに滑らかを使ったとしても多分詫びサビは作れるんだよね。

竹林ユウマ: うん。確かに。確かに。いや、なんかこれ今聞いて思ったけど、モダニズムは作られて完成した瞬間がピークじゃん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: そっから徐々に失われていってだんだんそぼらしくなってそれはモナニズムの中では粗悪なものっていう判定がされるけど逆にマビサビはうん。

安部和音: そうだね。

高橋英信: ああ、言ってました。反省違う。

安部和音: なんてなんかすごい。

竹林ユウマ: あのうんね。うん。

安部和音: お、もう1回喋って。

高橋英信: マジで俺やっぱ途切れてんだ。

安部和音: やばかった。

高橋英信: 完成つていつやねんっていうのが本に書いてあった。瞬てさ、工事言うのちょうどいいなって思つてた。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 瞬、瞬感じがわかんない。工事が完成すること。ああ。

安部和音: 瞬の意味って何? 瞬間それでも瞬てシュッシュンって終わるって意味じゃない? 違うのな。

00:44:09

高橋英信: 巡行はないです。ああ。

安部和音: どういて感じなの? これまあ劣化や消耗受け屋汚れがなんて

竹林ユウマ: 瞬の瞬間がピンク。こっちはうん。

高橋英信: 終わる。終える。あ、なんでもないす。

竹林ユウマ: はい、この価値が増していくって表現が正しいかわかんないけど、ま、一旦分かりやすいように。うん。

安部和音: 火でえ、うん。ま、時間経過を表現の1つとするって感じだよね。なんか時間経過が美しいっていうのじゃないのがめっちゃ好きだなと思ったわ。そういうば受け入れるとか表現をより豊かにするって言ってる時点で劣や消耗が詫びサビだとか腐食や汚れが詫びサビだとは言い切ってないじゃん。

竹林ユウマ: 時間。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: でもそれも美、詫びサビの美しさとして入れてもいいよのさ、フレームワークの中に入ってるっていうのはすごいねと思ったわ。ま、あとはその種として指摘表現で表現されるでこの大けの領域で表現されるっていうですね。この

竹林ユウマ: うん。うん。うん。確かにね。うん。うん。そうだね。た妻。うん。

安部和音: 2つなんかこの前話したじゃん。なんかこれってまあの何んまいの部分だなつて結構思う。

00:45:53

安部和音: うん。で、で、なんか気持ち悪いなんかあの、そそうマスター・ベン・ショナブルなこうなんて言うんだ、哲学っていうのはやっぱりないと詫びサビではないんだなって思った。うん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。そうね。なんか今1個気づいたけどモダニズムはなんか人間中心人間なんてか新設計での合理性なのに対して設計設計じゃない主義かこっちは自然中心中議。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ま、だからサの方はな、何て言うんだろうな。うー。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 人工と自然で分けてる。人口と自然は分けられるものなんじゃなくて人口も含めて自然であるみたいな考え方だよね。人口人口が自然の中に内してるみたいな。

安部和音: うん。そうだね。うん。

竹林ユウマ: うん。この思想すごいいいなって思った。うん。

安部和音: うん。うん。うん。なんかそれで行くと俺がさ、よ、なんか螢光、傾向っぽいデジタルっぽいカラー使いたいとかそういうのも許されるな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 詫びサビはみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。ま、そうね。アクセントにはなるよね。

00:47:57

安部和音: 結局例えば詫びサビってさ、多分さ、その自然主義に対してのアンチ勢とか和モダンとか言っちゃってるのに対して俺がデジタル使いたいって思うことも多分自然であるみたいなさ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: 解釈的にはできるのよね。多分でそれが入りすぎるとやっぱ人口ありきになっちゃうもとモダニズムになっちゃうんだよね。

竹林ユウマ: あ、できるね。全て。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 例えば俺がそのなんかデジタルカラーを使いたいっていうのがやっぱ先走っちゃうとモダニズムになっちゃう。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: オダニミズムの中の自然っていうものになっちゃう気がするからそう

竹林ユウマ: ああ、はい。そうだね。まあ、でもあれだよね。今その一見プロのも作られたウェブとかさ、そのデジタル領域で表現されたものって大体そっちだよね。オナニズナの中にあるその自然中心主義みたいな。うん。うん。

安部和音: そそうそそうそだしなんかさびさびとかなんか全精神とか言ってたのなんかさブサイトあったじゃん、あれ。あ、見せたっけ?いや、もう忘れて。

竹林ユウマ: なんだ? うん。うん。うん。あ、うん。

00:49:08

高橋英信: あ。

安部和音: ま、でもなんかさ、こう、あの、1人おがりを見せるみたいな、才に見せるみたいなそれは多分モダニズムだなって思った。

竹林ユウマ: いや、それはマジでめちゃめちゃ重い。

安部和音: 見せないんだよね、多分。ボそ言ってんのに美しさを感じのが詫びさびでウェブサイトに堂々とポエムを載せるのはモダニズムだなって。うん。だ、ハーケンとかはね、モダニズムな気がするね。大好きなんだけど周一すぎて素晴らしいんだけどモダニズムの美しさなんじゃないかと思った。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。そうだよね。あの、こう感じて欲しい。その詫びしさ、寂しさを感じて欲しいっていう

高橋英信: はい。

安部和音: うん。うん。そう、そなん。ああ、でもな

竹林ユウマ: その意図に基づいてされた表現は全てモナニズムってなるよね。装飾、装飾になる。うん。うん。うん。ま、そつか。

安部和音: ああ、ただな、意図、意糸糸はなんかこう意図はあるんだよな。理球に関してもなんていうマーケティングは存在するんだよね。

竹林ユウマ: 確かに。なんだろう?じゃあこの違いはうん。

安部和音: そなんだよ。そなんだよ。

00:50:28

安部和音: そなんだよね。ま、でも振る舞いとして見せたいのが立ち振る舞いとしあ、違う。えっと、佇まいとして見せたいのかじゃない?うん。

竹林ユウマ: うん。ウブの場合はデジタル領域で勇気を表現したいみたいな感じ。これから始まって勇気ま自然か自然を表現したいでその結果

安部和音: うん。モダニズムの中の詫びサビみたいになっちゃうとかよ。モダニズムの中のま、モダニズムになっちゃうみたいな話か。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: あ、これさ、俺今思ったけどさ、なんか装飾じゃなくてなんか演出になっちゃうみたいな。

安部和音: うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: これ伝るかな?いや、でも一緒か。

安部和音: ま、でもそうだよ。装飾と演出って方向性は一緒だけど振る舞かの違いなんだよね。

竹林ユウマ: うん。確かに、確かに、確かに。

安部和音: 多分これ。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: ジャ、こっちは振る舞になるのか、音質は。

安部和音: そうそう。いやのはアクションなんだよね。

竹林ユウマ: ああ、そつか。あの、そう感じからこの表現をするっていう。確かに確かに。お、確かに。いや、前回、前回これ話しといつよかったです。

00:52:01

安部和音: 振る舞。そなよ。めちゃめちゃね、これがね、俺ん中でね、いい、いい軸になってるわ。

竹林ユウマ: うん。うん。確かに。ま、でもそうそれを考え、それを前提としたらかさんが言ってたその意図的に民長隊を使いたくないみたいな。そ、一等的に面長隊を使うのはこれに当たるってことだよね。

安部和音: プに当たるからプル舞に見えないというかやっぱ精神性みたいなところで振る舞いぐらいのインパクトを与える。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。うん。うん。確かになんかこれそ演出は受け手にこう感じて欲しいというたらみがあるん俺結構こ

安部和音: 精神性で振る舞うみたいなあるあるアクションみたいな感じな気がする。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ちょっと待って。え、でもどうなんだろう?これはさ、これはたらみに入んないのかな?ミに入るのか入らないのか?演出。演出ではないか。

安部和音: たらみ。えっと解決とまたみがまた違う気がしたのよ。

竹林ユウマ: うん。なるほど。ま、でもこっちはうん。の環境で生まれたチャカリ価値を生みやすい。

安部和音: ソリューションと企画って違うんじゃないかっていうソリューションなんだよね。

00:53:56

安部和音: こっちってリキはソリューションだと思うわ。

竹林ユウマ: さ、なんか価値見せるんじゃねえじゃなくてこっちにも価値あるんじゃないかのが近いよね。

安部和音: をうん。うん。そう、そう、そう。近いと思う。

竹林ユウマ: うん。だから価値の喪失と転換がこっちにあって、もうじゃすでに価値を改めて感じて欲しいっていうなんか目ろみたらみかな。うん。うん。うん。はい。演出。うん。

安部和音: うん。うん。あ、あと今結構いい感じのこと。えっと、っていうのはみんなに分かつて欲しいんだよね。

高橋英信: あ。

安部和音: あ、演出、演出みんなに分かつてほしい。

竹林ユウマ: ああ、そうだね。うん。うん。そ、どれ?こっち?こっち?そうだ。こ振れ前。ああ。

安部和音: でも何んまい。ま、何んまいっていうかなんだな。これで言ったら何?装飾。あ、装飾。ま、振る舞いはみんなに分かつてほしいでいいからじゃ。うん。何んまいは分かる人が分かつて欲しいみたいな話なんで人に分かつてほしい。

高橋英信: はい。

00:55:23

竹林ユウマ: はい。はい。はい。はい。はい。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: でもこの2塾の中にえっと俺は結構こうなんか間を取りたいみたいなところやっぱあるんだよね。マスの感度高高いはずの人みたいなのが気づくきっかけにしたいってのがやっぱ共通としてあるから。

竹林ユウマ: うん。おお、すごいな。よくこの抽象的な概念をここまで発展させられてるな。でも確かにこのこれはね、すごいわかる。あの、こっちは割と濃度的な矢印が完全に受け手に向いてる。こっちは受動というか割と受け入れ姿勢だよね。うん。うん。

安部和音: いいね。うん。そうそうそうそうそうなんか軸ポジションマップでき、これ使えるよな、多分。

竹林ユウマ: なるほどね。はいはいはいはいはいはい。おもろいな。うん。マスマスにも届ける。そつか。あ、なるほどね。

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: はいはいはいはいはいはいはい。そつか振る舞りやすいけど演出だから本質が薄い。片まえは本質めちゃめちゃあるけど伝わりづらい。

安部和音: なんす。うん。ま、そうだね。そうそう。

00:57:03

安部和音: そうそう。

竹林ユウマ: これのアウすいのか。ああめおもろいわ。なるほどね。いいじゃないですか。うん。

安部和音: そう、そう、そう、そう、そう。で、佇まいよりだね。やっぱポジションマップで行くとっても佇まいよりなんだが、こうインパクトのある振る舞いをちょっと垂らすみたいなイメージ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。あるじゃないよ。うん。ふん。ふん。うん。なるほどね。

高橋英信: あ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。そうだね。

安部和音: ま、そんな感じっすね。で、え、結構あるね、俺。まとめてな。結構まとめてな。このいかなる進歩もないって何だっけな。あ、成長しないものか。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 詫びサビを見ても進歩はないっていうとこが好きだった。

竹林ユウマ: うん。うん。あ、も

安部和音: ま、あとはもうここはよく暗く不明でも温かいは結構コンセプトになる気がした。

竹林ユウマ: うん。うん。そうだね。うん。

安部和音: これめっちゃ大事かもなどか季節感がある。で、これはメモの気分で、ま、あとは私のうんうん。なんか振る舞いでやりたいことは俺これかもしれないなと思った。

00:58:53

竹林ユウマ: はい。ません。うん。

安部和音: 價値を作りたいわけではないんだけど。

竹林ユウマ: これまを作るというよりかはその再念式させるそのフォーカスのベクトルを改めて向かせると完全にアートアンクラフト運動でやりたいことがいは

安部和音: そう、そう、そう。ま、そうだね。ま、例えば地元が、地元の人が作る漬け物の美味しさ、美しさみたいなものとかさ、それをちゃんと投集している飲食店の美しさとかこう評価されるべきであるとかいうのを例えばこの理球っていうのは理球ランドがついたからこれができたわけじゃん。

竹林ユウマ: うん。はい。

安部和音: 多分理球が褒めたからやぼったいものとか国産のものとか朝鮮有の作者不傷のやぼったい民間を褒めたからそれに価値が生まれたわけじゃん。だから圧倒的な美を持ってリーダーシップを持つべきだなって思ったんだよね。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。いや、今思ったわ。それ同じく。これが必要だね。

安部和音: 圧倒的に分かりやすい美容を持ってリーダーシップを持ってあのね別の誰が作ったかわかんない漬け物をさ、通行なものであるっていう通行なものであると

竹林ユウマ: うん。

安部和音: いかいいよねっていうことデザインするとかそれでデザイン編集するみたいなおばあちゃんの漬け物っていうのをクリエイティブでやりたい。

01:00:26

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。分かります。分かります。ま、要は言ったらそのああ、でもこれちょっとずれてるかもだけどあのふ、フランス、フランスじゃない。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: あの、フレンチのあのバカでけえ皿の上にはあちゃんの漬け物置くみたいな感覚でしょ。うん。

安部和音: うん。まあ、ま、そう。あ、でももっと具体的な話でいくと Instagram でよくわかんないでも、あの、そこら辺にいるおばあちゃんのめちゃくちゃ美味しい漬け物でそのおばあちゃんに

高橋英信: あ

竹林ユウマ: うん。うん。確かに。はい。はい。はい。

安部和音: についてめちゃくちゃインタビューするみたいな。で、インスタでコンテンツ作ってポスト投稿して、いいね、いいね。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。知カメラでね。

安部和音: 3000件みたいな。で、なんかリールでバズってなんかなんかあの民家のおばあちゃんのところに行列ができるみたいな売ってもねえのにみたいな俺キルそれやったじゃんって思ってるから売る気のない人だったりとかするわけじゃん。

竹林ユウマ: ああ、確かに。

安部和音: そういう人ってこういうものの良さに気づいてる人ってのがそれをに価値をつけるとか売るとかってめっちゃいいよなと思って。うん。

01:01:48

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。そうだ。なるほどね。

安部和音: だから例えばさ、結構それってもデザイン会社がめちゃくちゃやってるなと思ってて、デザイン会社が自習プロダクトでさ、なんかいろんなものを拾ってさ、これっていいよ

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: ねってやってさ、商品化してさ、売るみたいなことやってるじゃん。なんかそれに近いから取り組みとしてこれやりたいからメモついてくれ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: これめっちゃ大事だと思うな、俺んで。

竹林ユウマ: 普通の社でそこら辺の着あ、理解しうん。

高橋英信: こ

安部和音: うん。あ、えっとね、でも俺、あ、今俺ちょっと伝わってないなと思うのが、えっと、フレンチって竹橋君言ったなんか、あ、そう、防具とかじゃなくて、えっと、誰でも分かるかっこいいクリエイティブにしたいって感じなんだよね。クリエイティブの作り方としては。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。ああ。うん。

安部和音: 例えばなんか オグマのその箱積み上げてるさとあるじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: ま、これとかって高級感に感じないんだよ。

01:03:31

安部和音: これはなんかでもそれより伝わってくるのがザラザラっていうのとさ、主一な色つて感じのイメージじゃん。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: いや、これって貧乏人にも取れるものじゃん。でも美しいじゃん。な、クリエイティブでおばあちゃんの漬け物を取るみたいな。ラザラしていてみたいな。あ、そうだね。

竹林ユウマ: うん。はい。はい。分かった。あの、高級感っていう牽制性を振りさないっていう。うん。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: うん。ただ宣伝されてる。

安部和音: でもそろそろそれでその洗されてるってのは多分なんかいろんなものを知っ

てる人のコンテンツもいろんな詫びさびなコンテンツも知ってる上でできるクリエイティブでこうそこら辺のあちゃんを取るみたいな。あ、でもね、俺それはそうなんだよ。ブルタスなんだよね。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。あ、でもブルーす結構。うん。うん。うん。夜最近めちゃめちゃいいさ、コンテンツ上げてたんだよね。

安部和音: ブルタスとかやっぱマクガフィンとかカルチャー系とかのクリエイティブってそういうじゃない?ええ、知らねえ。

竹林ユウマ: なんか移住空間額っていう多分がずっとやってる企画のなんか初映像みたいなこれですね。

01:04:45

高橋英信: はい。

安部和音: 見たことなかった。ええ、見よう。

竹林ユウマ: ドリンクハットドア

安部和音: あざす。

竹林ユウマ: これマジでいい。何人か忘れたけど、なんかガラスの工芸職人でその人が富山県かどっかに住んでんだけど全然知らん人だけどなんかその空間に持ってる銃空間に對してのこだわりみたいなところとかなんかその思想が見れるんだよね。

安部和音: え、おあ、かかっこよ。はあ。

竹林ユウマ: で、これ YouTube コンテンツだから、ま、プラットフォーム的にはすごいライトで、ま、いろんな層がいる場所で流してるけど映像はリッチじゃん。かなり上質でノクセして、あの、

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 13日前ぐらいにアップされても、もう3.4万回再生されてるみたいな。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: これ結構近いんじゃない?うん。

高橋英信: こ

安部和音: めっちゃ近いかも。ちゃんと世の中で評価されてる、えっと、期間がやるべき、やるべきことっていうか、そのために俺たちは評価されないといけないし、お金も稼いでおかないといけない。いや、めっちゃ思った。そんまもできるなって思って。うん。いるんだろうね。うん。いるだろうな。それなんかこれがさ、結構小切れじゃん。ガラスサッカーだったりするじゃん。

01:06:17

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。ベックでこれやればいいんじゃ。いっぱいいいそうや。こういう人。うん。なるほどね。うん。うん。うん。

安部和音: これがじゃないで、まあ、例えばなんだろうな、まあ、一見貧乏なんだけど、その人の美学があって、その美学に気づいてあげて、それ
竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: を誰でも分かりやすく拾い上げるメディアをやるとか。

竹林ユウマ: うん。いいと思う。レップにどういう人種がいるかわかんないけど。

安部和音: うん。ま、やっぱね、原住民は貧乏な人たちが多い。

竹林ユウマ: うん。そうだよ。だからこれをさ、その別ップ市民の23歳とかのさ、たらヤンキーみたいなさ、チンペラでもいいわけじゃん。うん。うん。うん。

安部和音: うん。ああ、いいね。いいね。これがやばいんすよとか言ってさ、あの、バイクの後ろめちゃくちゃ長いみたいなさ、っていうのさ、テクシをめちゃくちゃ映すみたいなさ。

竹林ユウマ: 確かに。え、それをさ、それをこのトーンでやんの結構唯一無理じゃない? めっちゃいいじゃん。

安部和音: あ、めっちゃ漏れたもんや。

01:07:43

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。いいね。

安部和音: まあ、メディアをやるかどうかみたいなのめちゃくちゃ置いといてなんかあれだよね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 多分めちゃくちゃ綺麗なホテルで、えっと、それをやるっていう美学はあるな。

竹林ユウマ: めっちゃ綺麗な補でうん。うん。うん。うん。まあま、そうだよ。だからそのさ、その風さん、その地元、地元というか土地から生えてきたいようなホテルにしたみたい言ってたじゅん。あた、それ土着文化に対する愛情みたいなところがあるじゃん。

安部和音: ホテルでそういうクリエイティブをやるっていうのは結構いいポジションマップになる。

高橋英信: うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: で、べでこれをやって、これ成功したらどこの剣でもできるわけやん。その新しくうん。ま、長崎県に次

安部和音: ま、そうだね。本当そうだね。

竹林ユウマ: 2個目が経ったとしてそしたら長崎県でこれをやめてうん。うん。ま、発展性がある。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: いいね。

安部和音: いいと思うな。ま、ま、こことこことかもあ、そのなんか例えば荒塗りの土壁あ、じゃ、違うな。不括好な向き出しの木の構造でできた脳布のやの原型をベースに新たな形の射室を作ったとかあ、そういうスタンスで多分これを参照して例えばイソップみたいのを作られたりとか絶対してるよ。

01:09:18

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: あ

竹林ユウマ: いや、でもそうだね。やっぱイソはその地域の特色をその店舗の建築に入れよく入れてるというか取り入れてるからなんか一見ぼらしい店舗みたいなのもあるよ。見ぼらしいまでは行かないけど。うん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: それこそあ、まあでも選択してあえてこの素材使ってるなみたいな一見古く見える鎌倉のイソップの店舗とかそういうところだよね。

安部和音: ま、結局なんか多分どっかの誰かがイサのこういう部分を拾って建築に落とし込んだから流行ったんだろうなって思ったわ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。あ、本読まそうね。大事やね。これだ。これとかで。これとか多分もうばあちゃんちにあったやつでしょ。

安部和音: 考えた。こもう本読んだんだなって思ったから大事だなって思った。うん。

高橋英信: か

安部和音: うん。うん。茶色の使い方がうますぎるな。本当に茶色の使い方がうまいわ。

01:10:43

竹林ユウマ: うん。なるほど。

安部和音: で、ま、このここはおもろかったなど。秀吉が気づいてくんなかつたみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: それを評価してくんな。日吉は中国の中国的豪華さの究極表現で金迫の射室っていうのがBの理想だった。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: で、羊が農家農家というところでその良さに気づけなかった。それはもう貧乏なものであるみたいなプロセスがあるからこそ非常者農家だったっていう話があるからその下ここにここに対してやっぱりこう憧れがあってそれ

竹林ユウマ: うん。ああ。はい。はい。はい。はい。はい。うん。うん。ふん。ふん。ふ。うん。

安部和音: がBBBであるみたいなっていうのはこれもう大分県の人みんなそうだよ。

高橋英信: うん。

安部和音: 大県にやっぱよくあるものはダサイから東京にあるものに憧れるんだが、この価値の見つめ直しは結構、えっと、大分市の人たちとかにはもっと気づい

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: た方がいいよと思ってて、だから、だからずっと俺は大分市の人たちは別に飲

み行ったり遊びに行った方がいいっていうのを

01:11:57

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: ミッションとしたいみたいな。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: い吉なんだよね、みんな。

竹林ユウマ: うん。まあ、だからここにここに価値を見出した理に対してじゃ俺が今まで散々苦労して手に入れたこれは何だったんやっていうことで選択を目したってこと。

安部和音: うん。そう、そう、そう、そう、そう。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: だからそんな世の中じゃさ、嫌だし、そんな世の中だね。地方は特に地方っていうか、ま、日本人は結構そうかなと思うから。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。そうだね。

安部和音: で、ま、今で言ったらさ、その中国的豪華さの究極表現っていうのは多分、ま、せ、西洋文化の豪華さなのよ。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: あ。

安部和音: 今でいくとね、2025年はもう西洋的なリッチっていうものが結局あのBの理想にみんななってるからなんかもうちょいこうわとか

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。確かにうん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 言った時にさなんかBの理想がその高級差でAOの高級差に対し輪の高級差でぶつけるの違うんだよね。

01:13:23

安部和音: 和の素朴さで行きたいんだよね。やっぱホテルはって思って原口さんたちが言ってる和モダっていうのは和の高級さんみたいなところにある気がもっと素朴でやった方がいい。

竹林ユウマ: はい。あ、ん、原口さんたちはかさんと逆の精神ってこと? ああ、確かに確かに。

安部和音: うん。ま、イシ銀の河原とか言ってる時点で江戸時代の高級みたいな話じゃ江戸時代の素朴だったりぜ、あの詫びさびとか全とか言いながらイシ銀の河と

竹林ユウマ: うん。

安部和音: か言ってるのがあれだからそこはデザインでどうにかできないかなって思ってるバランスを取るみたい

竹林ユウマ: うん。うん。そうだね。

高橋英信: お

竹林ユウマ: えっと、例えばじゃあちょっと一応確認のためだけど、ま、このイソップはモダニズムがを取り入れた結果でかさんがやりたいのはその我がモダニズムを取り入れるっていうなるほど。

安部和音: うん。うん。ああ、そうだね。でもイソップはちょうど良くね。

竹林ユウマ: なるほど。ソップはちょうどいい。

安部和音: まあ、ちょうどいいというよりかはそんなところでやっぱり輪に寄せてるじゃん。

竹林ユウマ: うん。

01:15:00

竹林ユウマ: ま、でもうまいよね、これ。なんか

安部和音: 色合いもそうだしさ。なんかその西洋の方、ヨーロピアンの方も輪に寄せてるヨーロピアンじゃん。

竹林ユウマ: ま、そうだね。このな、何て言うの?設計パースみたいなのは直線的科学的でどちらかと言うとその西洋っぽさがあるがクチャーに関してはこれまっぽさがあるじゃん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: だから骨組はモナニズムだけど完全その肉付けが全てはみたいな感じか。

ま、それがバランスがいいってことか。あ、したわ。

安部和音: そなならバランスがいい。

竹林ユウマ: なるほどね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: で、ま、どう考へても日本建築の小材がこの写真見た時にバッて出てくるわけじゃん。ま、これでだいぶ輪が輪が最初に来るな、やっぱ。そしてあと形状が床の形状がさ、小がりじやねえわ。そのなんだ、足みたいな。

竹林ユウマ: うん。そうだね。うん。これね、縁側。

安部和音: うん。そな、そな。ある。

01:16:07

竹林ユウマ: うん。うん。ふん。ふん。うん。確かに。確かこれすぐえな。めちゃめちゃ考えられてな。

安部和音: うん。すごいと思う。マジでバランスかかったな。

竹林ユウマ: うん。なるほど。

安部和音: うん。はい。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ま、そんな感じかな。ま、この最後の方はめちゃ面白かったけどね。

竹林ユウマ: うん。これはの時どうん。はい。はい。はい。はい。はい。うん。

安部和音: びサビが死んだ後、詫びサビの信者がさ、こう、あ、リ球の信者、詫びサビ、リ
が死んだと理球の信者があの方として残したわけじゃん

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: で、それってクソだよねって本じゃん、これって。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: うん。でもそれがやった鉱石つのはあるよねっていう。その声的現代化に飲み
込まれずに詫びが残ったてのはそういうことで方だったりリリファレンスだけを見てやってる
そのなんか文化っていうのもまあよねみたい

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。

01:17:13

安部和音: なこれはまもう雑談でしかないからそうそうそう精神なのに型として残され
たっていう皮にさは結構あるから精神のプロセスが大事であるということ

竹林ユウマ: うん。うん。はい。はい。ま、だから完全に失われるよりかは間違った形でも継
承される方がいいよねって。うん。ああ、確かに。うん。

安部和音: アウトプットよりも精申請の方が大事であるっていうことをこの方は伝えたかった
し、ま、俺もそう思うなって

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。それうん。

安部和音: うん。

高橋英信: ここ

安部和音: そうだね。はめちゃくちゃあのま、俺大体詫びサビ今50ページしか読んでないけど
大体今んところサビで大体知ってるなとか共感するなぐらいの感じだったんだけどま知っ
竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: たなって思ったのは初めて知ったなっていうかちゃんと向き合ったなってのは今
ここっていう概念かなそこにこととか今まさにこの瞬間に起きて

竹林ユウマ: うん。うん。うん。そうね。

安部和音: いることに最の感謝を払わねばならないとかそれで絶対できないじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。まあ、

01:18:30

安部和音: あの暇じやなきや。

竹林ユウマ: あ、なんだよ。これ暇じやなきやできないんだよ。そうでもこれがその前の
新骨調だよね。うん。

安部和音: うん。うん。うん。で、ででで、これ暇じゃないでできる方法ないかなって俺考えた
のよ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: それってびっくりさせることなんだよね。思考が止まるわけじゃん。

竹林ユウマ: ああ、なるほど。

高橋英信: ああ。

安部和音: 例えば急に急になんか仕事仕事仕事ってかなんかコンビニ入ったら真っ暗でその1秒後にめちゃめちゃでかい音でさになったみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: その瞬間って無で今の関心、今に最大の関心を払ってるわけじゃんみたいとか、ま、もうちょいあのやりやすい形で行くと、ま、チャンネルの

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: 入り口に入った時にどってかっこいいが押し寄せてくるみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: この瞬間そう照明が来てでっけスピーカーが置いてあって寿司みたいなバカンがあつてっていうないと思ってたもの

竹林ユウマ: ま、確かにね、の入り口をくぐると同時に、ま、くぐった後に直後に何飲もつかなって考えるやつはいないもんな。うん。

01:19:43

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: があるとか驚きっていうのは結構今にすごいフォーカスするよなっうん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。意識の誘導。ま、ビジュアルで言うと視線誘導が周一つことか。

安部和音: うん。ま、視線どころかもうなんか周辺までもジャックしちゃうみたいな瞬間なんかもうびっくりさせるじゃない。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。なるほど。うん。

安部和音: びっくりさせる。

竹林ユウマ: うん。うん。いや、分かる、わかる。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: そうね。あの、あの、なんだろう。この全とかで行われてるこのマインドマインドフルななんて言うの?あ、なんて言えばいいんだろ?マインドフルでいるために全の中で行われることって俺結構デザイン思考と近しいなっていうのを結構前に思ったことがあって、ま、簡単

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 行ったらうん。UX 体験設計質の高い体験設計をする時ってさ、やっぱその行動1つにめちゃめちゃ集中力がいるじゃん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 深い集中力が。

安部和音: うん。うん。

01:21:14

高橋英信: うん。うん。

竹林ユウマ: 例えば椅子に、ま、めちゃめちゃ人間中心主義な椅子を作るとして、で、まず1番最初に行なうことがその椅子に座るっていう行動 자체をまず見つめること。

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: で、それにはマインドフルな精神が必要で、そなうっていうことを感じて、あ、俺何言おうとしたんだっけな。

安部和音: うん。

高橋英信: あれ

安部和音: うん。ふんふん。

竹林ユウマ: うん。ま、でも、あの、これはあの、詫びさび前に限ったことではなくて、普通にそのブランドを作っていく過程の中に必要なものだと思って。うん。

安部和音: ま、分かる。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: た。

安部和音: ま、見つめ直しだもんな。基本的にはこれびっくりした時じゃなければ。

竹林ユウマ: そうだね。うん。うん。うん。うん。だからデザイン思考は全然得できると思つてんだよね。うん。

安部和音: はい。はい。はい。はい。あ、あと極端なノイズにさらされた瞬間ってものすごく今を見つめるなって思ったんだよね。

01:22:14

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 僕この本読みながらバーってノイズが流れ、ホワイトノイズが流れてるのを思い浮かん。最初びっくりするじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: バーってホワイトノイズが流れてきたらでもうなんか5分とかずっとホワイトノイズが流れてたら多分なんていうのホワイトノイズの中に聞こえてくる1本の音

竹林ユウマ: うん。

安部和音: みたいなのにすごい注目するんだよねが聞こえてくるようになつたりとかするんだよね。

竹林ユウマ: うん。ああ。はい。はい。はい。はい。はい。うん。ふん。うん。

安部和音: っていうのを今日なんかセミで感じてセミの音セミの音ってホワイトノイズよなでもなんか1本の音が聞こえるよなって思った時に俺今

竹林ユウマ: やば。うん。うん。

安部和音: を感じてるわって思ったんだよね。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: うん。だから結局自然っていうもののっていうのはノイジであるっていう話なんだけね。であるからこそ、えっと、今に見つめ直せるみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: ま、例えば葉っぱとかもそうだと思う。葉っぱってさ、木き、木をみ、1本の木として見たらそうだけどさ、葉っぱを見ようとするにはさ、まずこうなんかせ、1000枚

01:23:36

竹林ユウマ: うん。

安部和音: の葉っぱみたいのが目に入ってくるわけじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: そん中で1枚の歯を見つめるみたいなさに気づくとかさ、なんかそういったのはなんか体験で作ったら面白そうって思った。

竹林ユウマ: うん。ああ、なるほど。

安部和音: で、その木について考え、葉っぱ1枚について考えてる時と、弓について考えてる時とノイズについて、ノイズの1本の音について考えてる時はめちゃめちゃ今に最大の関心がある状態。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。なるほどね。し。

安部和音: だからなんかサウナとかとか座然とかってやっぱ普通の人が体験したら今を感じられないんだよね、多分。

高橋英信: お

竹林ユウマ: うん。逆にしちゃうん。うん。

安部和音: 未来とか過去のことについて多分考えてるんだよね。そのサウナとかでもそれよりももっとなんかノイジーな環境に入った時の方が今を見れるなと思う思った。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。なるほど。ね。

安部和音: うん。ま、て感じですね。今50ページ読んでこれだけ色々考えられたね。

01:24:56

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 本、この本はうん。

竹林ユウマ: いや、素晴らしい。割となんか結構さ、あ、その本 자체がさ、その、ま、概念的なものを扱うものだからさ、俺別にブランド運営とかブランド作りに発展しないんじゃねと思ったけど、意外とするもんだね。

安部和音: うん。うん。うん。いや、するでしょう。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: これ本読むために多分これぐらいの発見があるわけでしょ。

竹林ユウマ: うん。ま、20素晴らしい。

安部和音: 辞書になるよね。もうね、火でなんかこれ以外にあった。

竹林ユウマ: なるほど。

高橋英信: 僕が今考えてるのは結局それをホテルにどう行かすんやろうなってと。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あ、絶対言うと思った。お前の浅いとこだよ。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: いや、ま、でも確かにそれは難しい。うん。概念的な整理はできるけど、ま、実際にうん。

安部和音: だから、えっと、これを話したから今から竹林君が出たアウトプットについて話す時にやもっとこうって言えたりとかテキスト戻っていや、もうちょいこのテキストの部分ぐらいの感じのニュアンスなんだよねみたいな。

01:26:10

竹林ユウマ: うん。ま、そうね。共通認識がね。うん。うん。

安部和音: っていうのができる。できる。

竹林ユウマ: うん。共通言語が生まれるっていう感じか。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: そりそうや。

高橋英信: うん。

安部和音: そもそもでも今の話し合いでさ、竹林橋君と僕は具体性まで意識しながら喋ったから例えば別ップでこれをやればいいじゃんとかあのそのヤンキーの動画撮ろうぜとかクリエイティブは

竹林ユウマ: うん。

安部和音: そのなんか高級性という権威性を高級感という牽引性を振りかざさないような写真の撮り方しましうねとか決まってきて来るじゃん。歌戦までっていう感じ。

高橋英信: うん。はい。

竹林ユウマ: うん。はい。でもそうでしょう。割とこれはデザインに触ってきたから割とギリギリできる話だと思うよ。難しいとね。も上がってねえし。

安部和音: いつもこうなんだよ。2人で喋ってた。うん。

竹林ユウマ: うん。なるほどね。俺はね。

安部和音: ま、あとそのそもそもその文章に共感したとかさ、気づきを得たみたいなのはメモったりとかはた日である。

01:27:50

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: ん、なんだっけな。あの、旅する時に1泊するために草編んで天作ってみたいいやつ。

竹林ユウマ: あ、あれね。あれいいよな。あれいいよな。うん。

安部和音: ああ。はい。はい。あれ? ま、あの、ちょっとだけ後が残ったっていうところがキモよね、あれは。

高橋英信: でも結局それ外しちゃって何も元に戻っただの森になったけどでもその事実は残るよねみたいなさ。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: うん。うん。なんか

安部和音: で、あれは、あ、どうぞ。

高橋英信: うん。まあな、な、なんつう表利一体性があるものはなんかなみみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。

高橋英信: 詫びさびってみたいな感じ。

竹林ユウマ: あれ深いよな。

安部和音: 大

高橋英信: うん。だ、その詫びさびっていう領域においては何かに突き抜けることがしない方がいい。ていうか、そのしないことが詫びさびみたいな思った。

安部和音: あ、あ、まあいいわ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: た君、それなんか全分必要な気がするんだよね、俺。それだから後で春はうん。

竹林ユウマ: ああ、ちょっとじゃあうん。ちょっと1回なんかこういうフレームワークで何がいいって思ったのかを言語化してみようかなと思って。

01:29:53

安部和音: うん。今貼るわ。じゃあ写真撮ってテキスト化したんだよ。

竹林ユウマ: うん。うん。猿に戻るが痕跡は残る。

高橋英信: お

安部和音: こ

竹林ユウマ: なるほど。してるか。うん。うん。うん。これね、暗物は無き締むから生じる。いや、でも俺これちょっとね、会議的なんだよね。ここ、ここの文章、これ。

安部和音: うん。ん? あ、まあむはむだよね。無から生じるっていうのは結構俺も無に消すのは分かんんだけど無から生じるっていうのは俺も違和感があるから学したいなとは思ってたけど宇宙は無から生じてるよなって考えたらもうその常人に理解できる概念じゃないんだなって思ったって感じ。うん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。で、宇宙はセーフでもいいや、無からは生じないんだよな。それなんかさ、なんだ、

安部和音: 普通普通。あ、うん。力

竹林ユウマ: それ力が同じことやってんだよな。関東哲学者のさうん。そもそも無なんだから生まれるはずがないやろっていう。そ何かが始まてんなら必ずその要因があるはずって

いう。

安部和音: ああ、力とね。

01:32:29

安部和音: でもでもどこかでは無から生じてんだよね。何かがだからこの世があるわけだよ。

竹林ユウマ: あ、そのバタフライエフェクトを辿どっていったらどこでしょ。

安部和音: たたどりまくった先に無からUになった時があって、それもしくはあったからあつたっていう話でい、これ無理。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。いや、これ、これは無理だよ。あの、人間の理性だけないと思う。

安部和音: これ無理。これ無理。ここはもういいやと思ってるけどね。

竹林ユウマ: うん。そうね。そう。なんかあの哲学の中でのまそれなんかその主張を指示して派っていうのがいるんだけどそいつらが言うにはその辿どっていった先の何か1個のこのきっかけこれこそが神だみたいな

安部和音: へえ。

高橋英信: あ

安部和音: うん。うん。まあでもさ、そういうことでしか言えないんだもん。

竹林ユウマ: そうなんはい。はい。

安部和音: そうしか言えないからしようがない。もう、もういいんだけど。ま、これはこの話に関しては俺もうパンフレットにそのまま乗してもいいかなって思うぐらい。

竹林ユウマ: いや、マジで本当にそう。これいいよな。

01:33:47

安部和音: そのままパンフレットにしたい。

高橋英信: はい。

安部和音: 俺はやばいよね、これマジで。

竹林ユウマ: いや、俺もこれ食ったわ。この文章。

安部和音: ま、でなんだっけ？ そのこの文章についてはとりあえずもうみんな感動してるから良くて秀の話を今聞いてなかったから聞きたいって。

竹林ユウマ: です。

高橋英信: あ、大したこと言っていて。

安部和音: 勝利一体よくわかよくわかんなかった

高橋英信: あ、この話に限らずこの本を読んでなんか物事の、ま、結局安倍っていう言葉に収まるあの話をこれからするんだけど、ま、なんかどっちかにこうなんて言うの？行きすぎちゃったらなんて言うのかな？うん。な、何？わかんねえや。詫びサビではないよね、それは

みたいな感じがして。

竹林ユウマ: 分かるわ。分かるわかる。うん。分かるよ。

高橋英信: まあな、その先の言葉が思いつかないからこの話はここで終わるんだけど。

竹林ユウマ: あの、2元性、2元じゃなくてうん。うん。はい。ああ。はい。はい。はい。うん。

高橋英信: うん。うん。これも本に書いて

安部和音: うん。

高橋英信: なんか、え、ゼロを見た時の可能性のその雰囲気を感じるよねみたいな。なんかさつきのユマが言ったなんだつけ?部屋に置かれた鍵みたいな歌詞みたいにじゃん。

01:35:17

安部和音: うん。

高橋英信: それを見た時に、ま、日本人が彷彿とするそのなんて言うの?感情っていうのはなんかこう匂いみたいな感じでさ。うん。なんかむわっとする感じじゃん。

竹林ユウマ: はい。はい。うん。うん。うん。うん。うん。いや、分かるよ。

安部和音: ああ、なるほどね。匂い。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: それを匂いと呼ぶのはま、でも匂いってさ、言葉で定義できないじゃん。あの、現象学的じゃん。

竹林ユウマ: うん。いや、おもろい。確かに。

高橋英信: うん。ま、目で目で感じる匂いみたいな。頭で感じる匂い。そうそう。中道って言葉だった。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。いや、分かる。うん。

安部和音: 匂いってない学的なところっていうのはめっちゃ詫びサビな気がするな。うん。うん。

竹林ユウマ: ま、そうやね。うん。ま、それはそういえ多分あれだよ。

高橋英信: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 秀が言ってんのはこの2元0か1なのでそのどちらかの極端にま表現でも思想でも振るとあの絶対的な回が生まれちゃうじゃん。それを中道貫くことによってその見えない。あ、その、ま、なんか答えを隠すじゃないけどその奥行きが生まれるっていう。

01:36:37

高橋英信: Ja

安部和音: うん。ああ。

竹林ユウマ: で、この話もなんかまさに動だと思う。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: 存在しないわけじゃないけど、なんかそこにいたで断元数もできない。なんか

それはなんか例えばじゃあえー、あ、これ、これ、これ、これ俺中道だと思うんだよね。

安部和音: うん。うん。うん。

高橋英信: お

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 別なかったわけでもないけどわけでもないみたいいな。なんかその解釈の余地が生まれるからその奥行きを感じて多分このストーリーはすごいいいなって魅力を感じたいなことな気がする。うん。うん。うん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。ふ。

高橋英信: うん。うん。うん。うん。ま、その中道の話言ったら両極端がモダニズムだっけなのかなみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ああ、なるほどね。確かに。じゃあ、まだこっち側はうん。ま、そうだね。

安部和音: うん。両極端。

高橋英信: モダニズムって分からんだけど、ま、めちゃくちゃ合理的ってことでいい。

01:38:07

竹林ユウマ: 人間中心主義の合理性のなんかうん。はい。はい。はい。はい。はい。

高橋英信: うん。だったらやらないことに対してもさ、合理性があって、やることに対しても合理性がある。

竹林ユウマ: の地り性の境地って何だと思う?と思ったんだけど、この詫びサビを中道だとするとガタっぽの極端がこの合理性の境地ででもう

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 1個が非合意性の境地だとして何なんだろうな。いや、多分それはここじゃないかな。

高橋英信: 理球の理球のこだわりと

安部和音: 合理性の境地じゃない? それ普通にそれが合理性の境地極ち

竹林ユウマ: あ、えっと、練中心主義の効性。こっちが自然。ちょっと難しい話になってきた。

安部和音: このこれなんか軸が違う気がするな。ああ、まあ、いや、そ、非合理性と自然中心はでもなんか非合理性っていうのが自然中心かと言われたらそうじゃない気がする。

竹林ユウマ: あ、確かにそうだね。難しいな。ま、確かに。

安部和音: 人間中心主義が合理性ってのは合ってるという。ま、非合理性の境地1番振り切ったら無駄無駄無駄ニヒリズムとかシュールリアズムとかそっちだと思うんだけどプロセスがないから自然じゃん。

01:40:42

竹林ユウマ: なんか民族的なアニズとかあのなん、ま、簡単に言った自然崇拜的な全ての物に魂が宿ってますねみたいな。

安部和音: アニミズムって何だっけ? うん。ま、でもうん。

高橋英信: あ、え、ああ。ああ、そういう感じか。

竹林ユウマ: たら宗教的で、例えばその外側から、外側にいる人たちから見ればなんかそのなんて言うの? 例えば祭りとかうん。

安部和音: まあでもなんか結構それはやっぱり本当に法作になってほしいからなんとなくやってるとかなんか例えば政治的な意味合があってさ、村をまとめるため

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: にさ、やっぱりていうのが結構やっぱ人間中心主義だなってすごい感じるんだよね、俺。祭りとか。

竹林ユウマ: なんか無信論と靈的で分けれないかな。あ、難しいわ。ちょっと一旦これ保留にしよう。うん。

安部和音: うん。うん。これはね、むずい。これ違う気がするな、なんか。

竹林ユウマ: いや、でもこいつが中道なのだとしたらこの両極端にモナニズムとなんかもう一方がいいはずじゃない? うん。うん。

安部和音: うん。アビサビとモダニズムは別になんかそこにはない気がする。

01:42:11

安部和音: みモダニズムってのはなんか極端なものではないと思うにだってに工業製品とえっと思考芸の美しさみたいなのでじゃあバーハウスっていうのも

竹林ユウマ: うん。

安部和音: モダニズムって言われるとしたらちょそれも中道的じゃん。

竹林ユウマ: うん。どにおいてある? なん

安部和音: 主行裝飾的なものと工業的なミニマルさっていうところの動だつたりとかするからなんか極端なものではない気がする。

竹林ユウマ: なるほど。あ、

安部和音: バビサビなんだ。

竹林ユウマ: なるほどね。

安部和音: そのなんか詫びサビっていうのをちょうど遠くなら何をじや横軸とするかっていうのがちょっと違う気がするからこれ難しい気がする。

竹林ユウマ: うん。なるほど。ちょっとトイレ行ってきますか? トイレ行っていいですか

安部和音: だから結局さ、多分アビサビンゲビサビって結局こういう2元だからこのさ、中道を行くとかいう2元性みたい

高橋英信: うん。

安部和音: ののすらも詫びサビは否定してるんだよ。多分俺は思ってんだけど。

高橋英信: ま、その明治化することはどうかとは思う

安部和音: うん。いや、そう、そう、そういうなんか、いや、結局そのいろんな軸のなんか100個ぐらいの軸を作ればおびそびは表現できるんだけど、あの、2個で表現できるものじゃないっていう話。

01:43:57

高橋英信: うん。

安部和音: で、その構成する要素ってのはこの本に書いてあったからでも

高橋英信: ええ、もうあ、ま、そうすね。この浴びが真ん中にあるっていうのはそうじゃん。

間にあるのは

安部和音: うん。アビサビを構成する要素っていうのでうん。

高橋英信: 電波悪いかも。音から悪いの置いと

安部和音: いや、すごい違和感があるな。アビサビを今2次元のポジションマップじゃなくて、あの1次元のポジションマップに、あ、2次元か。2次元に置こうとしてるのが3次元じゃないかな。せめてサビってのは多分東道じゃなくてなんか1番端っこな気がするんだよな。線で行くといいや、もうなんかまま

高橋英信: ああ、もはやそのグラフの外にある。

安部和音: 僕詫びサビとアウフ平便是違うと思うんだよ。だからなんか俺洞道じゃないと思う。

竹林ユウマ: ん、あげさげ。

安部和音: なんか詫びサビっていうのはなんか詫びサビって感覚をた感覚のことを呼ぶ現象学的なものを呼ぶことで息みたいな例えば息を構成する構成要素

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: うん。あ、見てないす。

01:46:27

安部和音: 日で YouTube 見うん。竹橋君後編も見た? なんか息を構成する要素ってさ、あ、これ俺理解したんだよ。

竹林ユウマ: こ辺見たよ。うん。

安部和音: この図面図式、この図式みたいな話なんだよな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。あ、そうだよね。だって

安部和音: あのアビサビって多分。うん。

竹林ユウマ: この資格というか立法体の中でサビは表現できるもんな。ああ、野望。え、地味。

安部和音: で、点じゃない気がすんだよね。なんかしかもわびさびはそのなんか面なんだよね。

竹林ユウマ: 渋こか。この三角形か。

安部和音: ま、そうだね。

竹林ユウマ: うん。そうだね。うん。うん。ちょっと待って。

安部和音: まあ、そうだ。あ、でもなんかこれで言ったらえっとし分野望品げ下品の三角形の半分だね。半分の三角形そのそのなんだなんて言うの?立法隊の三角形バージョンって何だっけ?

竹林ユウマ: きどこ?これうんうんうん三角水じゃないか。三角中。

高橋英信: 三角中10三角 Ja

安部和音: じゃねえんだよ、これ。え、中、あ、そう、そう、そう、そうだ、そうだ、そう。こだとと思うんだよね。なんかで上品もなんか下品も入るしも入るしでもあ、あの甘み、あの、味派ではない気がするんだよみたいな。

01:48:05

竹林ユウマ: うーん。うん。あ、そつか。そしたらじゃあ地味も入ってんのか。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: だからこの三角中なんじゃねえかなって。だからなんか中道とよりかはその三角中のご概念のことと言うからアビサビがポジションマッピングが厳しい。

竹林ユウマ: からうん。うん。うん。うん。あ、分かる。

安部和音: 詫びサビをポジションマッピングすることは難しい。だから詫びで手動かす時に考えるのはこの三角中の要素をに絞って作りましょうみたいな話分かる?この使うものはこの息で言うとこれだけです

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: グラデーってことでしょ?うん。

安部和音: みたいなっていうのをまずなんかこう文房具セットとして持っておいてその中のポジションマッピングをこうしていくみたいイメージが

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: うん。はい。はい。はい。はい。はい。なるほど。なんかそのまま使えそうだ。

安部和音: うん。ま、でも甘味も入ってきそうな感じもするけど。

竹林ユウマ: 甘み甘みが入ってくるイメージないけどな。

安部和音: パラティーノサンズとかま、入りやすいマス向けのホテルって人しみたいな話やんなって。

01:49:42

竹林ユウマ: パラティナサは甘味ではないんじゃないかな。甘い。ああ。

高橋英信: うん。

安部和音: 小じゃん。

竹林ユウマ: はい。

安部和音: こ、小、小難しいよ。難しい話になってきたわ。ま、いいや。これもいいや。

竹林ユウマ: 備中だ。小尾。あ、小ね。難しいな。うん。うん。

高橋英信: お

安部和音: でもまあいいんじゃない? それ以上風化ボンなくてなんかでも詫びとモナリズムっていうのはなんかこう愛するものじゃなくて似ているものって本に

竹林ユウマ: うん。いいと思う。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 書いてあったからそれで比べる必要はない。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。なるほど。うん。いいと思います。

安部和音: 比べるっていうかモナリズムと詫びサメの違いは何? っていう話であって対局にはない。概念的な話でもここまでいい。はい。で、竹橋君が作ったロゴの話に行ける。

竹林ユウマ: うん。あ、そうね。ちょっとここら辺にしつくか。そう。あの、思い立ってとりあえずうん。

安部和音: あ、待って。概念的な話の指名がちょっとしたいかも。

01:51:04

安部和音: なんかこういうのさ。

竹林ユウマ: うん。やる。うん。うん。

安部和音: いや、なんかヒがさ、ちょっとやる意味分かってないじゃん。意味っていうかなんかこうなんて俺たちがこういうこと話してる時ってさ、こういうことをテーマに喋っていたら試作が思い浮かびますよねみたいなブレストって意味

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: わかる日でま、なんか説明する時にさ、例えをさ、説明するじゃん。

高橋英信: うん。

安部和音: こういう概念的なことを説明する時って。

高橋英信: うん。

安部和音: で、例えばあのブルータスでこういう動画が出てて、こういうことやればこれそれじゃねって言った時に試作になるじゃん。具体的なっていうのをうう生み出す時間かつ共通値を作る時間みたいなイメージなんだよ。

高橋英信: はい。はい。うん。はい。

安部和音: 合ってる確

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ま、浴びさび、ま、何でもいいけど何か概念を理解して、ま、それ、これに沿ったブランド作りをしていきましょうっていうのが前提になった時に、じゃあこのデザインを見てで、これはその思想に乗っているのか、ま、取っていないのかっていうその、ま、全員の共通認識と共通言語が作れるから、ま、そのブランドを作る前段としてなんかこういう中的な思想の話するのが大事みたいな感

01:52:47

高橋英信: うん。基準作るってことな。

安部和音: ま、プラスだから、その具体性の話で言ったら、この話をしてる時に秀が具体性のある試作みたいなのがこの会話の中で思いついて欲しい時間なんだよね。

高橋英信: うん。

安部和音: あ、じゃあこれめっちゃこれやつたらおもろくないみたいな。ニヤニヤみたいな。だからこれを使ってここれこの先にどういうエクするんだろうしたらいいんだろうっていうことを考えるんじゃなくてどういうアウトプットにするんだろうつ

高橋英信: て

竹林ユウマ: 目確

安部和音: て考えて欲しかった感じ。どういうアウトプットがいいかなって。お前がお前で考える時間で俺が俺で考える時間で竹橋君竹橋君で考える時間って感じだから喋るべきだし思いついたらそれを言って竹橋君がそれ

高橋英信: ああ。うん。はい。

安部和音: をメモってくれてみたいなそういう時間までいるのは俺は多分竹橋君にもなんか言った言ってると思うんだけどあの昔

竹林ユウマ: ここはちっちやい。うん。

安部和音: こういう時はどうしたらいいのなんかうん。

竹林ユウマ: うん。ま、あの、会ってる、合ってない、関わらずとにかく言語化して言葉にしてみるみたいな感じか。

安部和音: ああ、なるほど。

高橋英信: うん。

01:54:35

高橋英信: うん。はい。

竹林ユウマ: うん。そうするとききっかけが生まれるから、それについて議論ができる、さらにその共通認識を洗させていくみたいな。

高橋英信: うん。うん。

竹林ユウマ: うん。なんかその作業の繰り返しが感じかな。OKとNGの共通認識をま、別に間違ってることでも言ったらそれに対して議論できるようになってでその議論を繰り返すことで洗礼されていくブランド

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 対するどういうブランドを作ればいいんだっけ考え方を感じか

安部和音: うん。ま、なんか肌感覚がないなら喋って間違って覚えていくみたいな感じ。

高橋英信: うん。

安部和音: ないから喋んなきゃいけないって感じだね。肌感覚がないからこそ間違えないって。

高橋英信: そう、どういうこと? はい。

安部和音: 今間違えるタイミングでもっと後で間違えたら大変なことになるって感じ。
竹林ユウマ: ちょっと一旦連絡を返す。すげえな。2時間詫びサビの話してんの気持ち悪すぎだろ。いや、でも大事でしょ。
安部和音: 本当に本当に早く終りたいんだけど、このミーティングは終わらねえんだよな。いや、めっちゃ大事だし、ま、めっちゃ成長してる感覚はある。
高橋英信: そう。
安部和音: ま、結局みんながバランス感覚取ってる感じだからでもヒでこうバランス感覚取ってかないといけない。

01:56:33

高橋英信: うん。
安部和音: ま、めっちゃ大事なのが竹林君がさ、ボクとか、えっと、フレンチの皿におばあちゃんの漬け物側みたいに言ったじゃん。
高橋英信: はい。
安部和音: で、それに対して俺がちょっと違くてっていうのが大事なんだよね。
高橋英信: はい。
安部和音: い、っていう議論が起こることがめっちゃ大事なん。これがないと、これがないから原口さんとアトリエしるみたいになるんだよね。
高橋英信: なるほど。うん。うん。あ、よくわかった。
安部和音: モダンっていう言葉でコミュニケーションが少なくてニュアンスはナーナーでやつちやってるからそういう物づくりになる。この会話があるから俺たちはそういうことにはならない。うん。
高橋英信: そのそっちの話だしはい。
安部和音: だから、ま、自分の考えは言わなきやいけないし、黙ってたらアウトプットで間違え。
竹林ユウマ: よし。さて、ま、じゃあこんな感じで、ま、ロゴに関しては、ま、一旦思いついたら手を動かしてみようと思って送ったやつで下が元々のオリジナル。
安部和音: はい。うん。うん。うん。
竹林ユウマ: オリジナルの本当でマンチさんに作ってみたが上で、ま、色々糸としてはうー、ま、何か分かりやすい特徴を付け加えたいっていうので、この A の橋、ま、これを不完全にしてみよう。

01:58:16

安部和音: うん。うん。ふん。ふん。ふん。ふん。
竹林ユウマ: っていう試みで、ま、こういうぶった切って、ま、ちょっとセリフっぽい、ま、セリフじゃねえな、髭っぽい部分を追加してる。

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: で、ま、あとはそれこそ、え、なんか元の元の本当だとなんかフットワークが軽すぎる印象があって、とつ構えてない。

安部和音: うん。うん。

高橋英信: おお。

竹林ユウマ: ていうのもこの地面と設置面が弱すぎるからちょっと軽やかな印象がある。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: で、その宿自体は、ま、その土地から生えてきたようなホテルにしたいっていうのがあったから、もう少しどっしり構える。

安部和音: 深、深すぎる。

竹林ユウマ: ちゃんとこっちに足をつけるみたいな。

高橋英信: 6

安部和音: 大丈夫。

竹林ユウマ: え、何すぎる？ 深すぎる。

安部和音: 深すぎるだろ。深すぎる。

竹林ユウマ: そう。ま、そうね。なんてい、ま、結構無理やり言語化してるところもあるけど、ま、これなんかちょっと透明で見てさ、ま、元々このウェイトが細いことまでちょっと軽やかすぎるじゃん。

01:59:32

安部和音: 本当のボトムラインの話で足くとか初めて聞いたんやけど。うん。ふんふん。

竹林ユウマ: あの、ホテルのロゴとしてはちょっと頼りない感じがあるからもう少しどっしり構えられる。もうちょっとなんて言うの？ あ、頼り買がいがある印象にしたいなって思って、このそれぞれの髪の部分をちょっと拡張させて、ま、分厚くして。

高橋英信: うん。ああ。

安部和音: はい。はい。うん。うん。

竹林ユウマ: これちょっとフィグマコピしたからちょっと消えてるけどちょっとじや、比べてみるか。

安部和音: ふん。ふん。ふん。カピペ下から切れてんの？ ああ。

竹林ユウマ: あの、からコピペしたからペして持ってきた。ちょっとサイズ違う。あれだな。

あ、こんな感じで。あ、そう。ここいじってるね。

高橋英信: あ。

安部和音: うん。うん。ふん。うん。うん。ふん。

高橋英信: ああ。

竹林ユウマ: あとはここぶった切って、えっと、ま、直線でぶった切ると学的になりすぎちゃうから、ま、少しこの止めの部分のニュアンスを出すためにウェイトを変えてる。

02:00:48

安部和音: ふん。ふん。

高橋英信: はい。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: で、あと、え、A がね、造形かっこいいのにちょっと頼りなさすぎるので、ここら辺、ここら辺ちょっと不好だなって思ってるから、この髪の部分をもうちょっと鋭く、ま、地面に設置面を広げる感じで拡張させてる。

安部和音: うん。うん。

高橋英信: うん。

安部和音: うん。はい。

竹林ユウマ: で、M に関しては、えっとね、これぴったり合わないの。ま、そうね。こんな感じ。ま、例えば、えっと、ま、このさ、

安部和音: うん。うん。ふん。ふん。ふん。ふん。

竹林ユウマ: M がめちゃめちゃ弾力があって、ま、グミみたいな性質だったとして、これを地面にちょっと押し付けたらなんかぶによってこんな感じで拡張しそうじゃん。

安部和音: うん。

高橋英信: はい。

安部和音: うん。うん。

高橋英信: ああ。

竹林ユウマ: それを、ま、表現してもうちょっと地面にちゃんと設置してるつける。で、この真ん中の棒の部分を、ま、横に拡張してうんと尻り構える印象いで、え、ちょっと

02:02:01

安部和音: うん。ふ。

竹林ユウマ: O ジゃねえ、U ずれてるけど U も、ま、左右に拡張してる。ま、こんな感じの糸すね。

安部和音: うん。うん。ふ。

竹林ユウマ: うん。あ、じゃあ先にこっちも説明すると、ま、これはおまけ大文字でやってみたらどうなるんだろうっていうので、え、もうこれめっちゃ雑に作ってる。

安部和音: うん。ふん。ふん。

竹林ユウマ: だからもっと整える造形を整える必要はあるんだが、ま、A はさつきと一緒にね。

安部和音: うん。うん。ふんふ。

竹林ユウマ: で、M、M の効果を拡張さてと、あともうちょっと一、今これ大文字にすると、ま、サンセリフ的な直線的な印象が強いから、M のこの棒の部分をちょっと薄くして、もっとそのウェイトのコントラストを出して、

安部和音: うん。うん。ふ。

竹林ユウマ: あ、そうですか。まあ、なんかその、ま、スニットとかそれこそ活版印刷、ま、イ

ンク的なそのに見のニュアンスを出してみようかなっていうので、ま、このちょっとウェイトをバラバラにしてる。で、

02:03:29

安部和音: うん。うん。うん。はい。はい。うん。うん。

竹林ユウマ: Uも同じ容量かな。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: Uはといってないかな? Uじってないね。ま、そんな感じですね。

安部和音: ふん。ふん。ふん。

竹林ユウマ: で、ま、それぞれをビジュアルに落としてみたらこんな感じ。ちょっと分かりづらいけどサインにしてただやばちよつとウェイトが細いからもしこういうもこのパラティーノサンズのライトのウェイトをまなんかサインにするならちょっと見せ方は考えた方がいい考える必要があるなっていう

高橋英信: Ja

安部和音: ふんふん。ふん。ふ。

竹林ユウマ: 感じだね。うん。こっちもあ、割とサインにするなら大文字はロン外かも。見にくすぎるから結構大きくしないと。

高橋英信: お

安部和音: うん。うん。うん。ま、このパターンだったら多分もっとちっちゃくするパターンだとと思うね。でも

竹林ユウマ: うん。死認性が悪いね。もちっちゃくするパターン。これ。うん。ま、確かにちっちゃいの可愛いな。ま、そんな感じす。

安部和音: すればうん。そうそうそう。接着すれば全然いける。そうそうそう。はい。うん。うん。

02:04:42

高橋英信: ああ。

竹林ユウマ: うん。あ、で、小文字の A はちょっとまだ検討していない。

安部和音: ま、単純にバッてやった時ダサでしょ。

竹林ユウマ: あ、ちょ、え、A の造形ダさすぎるから、ま、これをロゴ化するなら、あー、A だけ別のコをベースにしてうん。組み立て直すっていう必要がありそうだなって感じかな。

安部和音: うん。まあ、そうですね。

高橋英信: こっちか。

安部和音: はい。

竹林ユウマ: そんな感じです。

安部和音: オッケーです。ありがとうございます。えっと、結構パット出しでクオクオリティ高

いなと思ったのが所初感で、で、めちゃくちゃいい感じだなって思ってるんだが、えっと、まず左上のやつから行く

竹林ユウマ：うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音：と、えっと、化粧品っぽさをやっぱぱっとみ感じたんだよね。

竹林ユウマ：うん。うん。うん。

安部和音：女性的すぎるのを感じ。女性的で原因左下のアムの方小文字決身左下のアムはあ、ごめん。

竹林ユウマ：はい。はい。はい。うん。うん。よし、いいよ。うん。

02:05:59

安部和音：ま、まずその与える感情でとやっぱ左下が良くてパットがえる感情ね。

竹林ユウマ：うーん。なるほど。はい。はい。はい。うん。うん。

安部和音：で、えっと、それはなんでかって言うと、ま、単純に多分優しい優しいから感じのサンズがだからちょっと媚びてる感じだったりとか子供っぽい感じっていうのがやっぱそのリッチでリッチなあのクリエイティブになるであろうから写真スチールと

竹林ユウマ：うん。うん。優しい。うん。うん。

高橋英信：うん。

竹林ユウマ：うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音：かそれに対して与えたい感情としては優しい子供っぽい口ゴっていうバランスでいいくとこっちの方が与えたい感情ではあるんだけど A 大文字の A がかなりクオリティが低い。

竹林ユウマ：うん。うん。うん。うん。

高橋英信：はい。

安部和音：このこのフォント M と U はめっちゃ良くて、あのあ、あれね、あのオリジナルの M と U は小文字ね。小文字。うん。結構ちゃんと作り込んでる感があるんだけどなんかそれこそ俺も思ったの。

竹林ユウマ：うん。うん。はい。はい。はい。こっちは。うん。オリジナルね。うん。あ、小文字。うん。

02:07:17

竹林ユウマ：うん。うん。

安部和音：A お文字の A がなんかクオリティが低いな。A だけみたいな思ったからのかえっとこれで行くと左上あの竹橋君があつた方の俺のうん。

竹林ユウマ：うん。うん。うん。うん。うん。うん。こか。あ、ちょっと待って。一瞬ちょっとやってみたいことがあるから。うーん。そうだね。これ髪かな。やっぱ多分ここがリッチなんか。

安部和音: こっちに関しうん。うん。うん。うん。うん。俺もそれやってみたかった。ああ、リップだね。

高橋英信: うん。うん。

安部和音: Aだけ。えっと、今思ったのはそこじゃなくて、ま、そこもあるんだけど、ま、やっぱ中かな。

竹林ユウマ: ここ。

安部和音: この切らしそこで切れてるっていうのがなんか例ええばえっとわかんないよ。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: ま、多分やったと思うんだけど、ここま、こ、これ、これぐらいまであったらどうなんだろうとか

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。ちょっと待って。

高橋英信: それ中繋げちゃったバージョンを見てみたい。そうそう。その中の根元をゆが触ったって言うからそれだけでもいいんじゃないかな。

02:08:51

竹林ユウマ: 繋いでちゃったバージョンどっかにあったてえっと、こっちここ残して横はそのまままでございます。

安部和音: 、形だけ変えてってこと。横棒横のいやうん。

高橋英信: ここは繋げる方向

安部和音: あれ多分あれだよ。横棒の首くれのところもの話もしてるわ。

高橋英信: あ、そう、そう、そう。横の右の目元のところ。

竹林ユウマ: ん、これ両つああ、そういうこと。

安部和音: 首、その首もの両方につけたらどうなるんだろうっていう話でしょ。

高橋英信: 今力スロある。カスルさ。それくれって言う。

安部和音: そこもその足の部分もこうだし、そのくれもむずい。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。はい。オッケー。うん。えと、どうしようかな。ま、くれでいいと。えっと、ちょっと待ってね。どうやってやろうか。ああ、こすればいいのか。あ、オッケー。オッケー。はい。で、こいつを残して目立ね。あ、でも印象変わるね。こっちも

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 1回簡易的に見てみるわ。

安部和音: うん。逆じゃね。

02:11:44

安部和音: あ、重心つけるん。あ、そういうことか。

竹林ユウマ: はい。間違えた。えっと、

高橋英信: うん。よ。

竹林ユウマ: そんな変わんない。もしかしてそんな変わってないか。

安部和音: ま、話せばんないぐらいな。

竹林ユウマ: 一旦雑に作るとかですね。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: うん。なんか微妙な気がする。

安部和音: そうね。

高橋英信: それ左のくれ上側につけたらどうなる

竹林ユウマ: をこっちけんならじゃこっちもつけるか。いや、こういうのやってみんのが大事なんだよ。

高橋英信: やばい。画面が止まった。

安部和音: 絶対違うだろ。多分やって見ないとわかんないんだけどさ。

竹林ユウマ: チームあ、はい。はい。そうです。

高橋英信: ああ。いや、ああ。ああ。ああ。ああ。あ。それさ、え、そのくれってさ、左右両方に同時につけないといけなかつたりする。

竹林ユウマ: うん。うん。

高橋英信: バランスとかそういう話で。

竹林ユウマ: いや、ま、造形が綺麗であればこっちだけつけないといけないとかはないね。だから外しても大丈夫。

02:14:34

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: そなん。

高橋英信: なんかこのさ、横線がさ、斜めになればいいのかな? 斜めに見えるようになったいいのかなって思ってその話をしたんだけど。なんかこう S カーブみたいな感じで。

竹林ユウマ: ああ、そういうことね。はい、はい、はい、はい。了解したわ。

高橋英信: そうそう。そう。

竹林ユウマ: えっと、こうか。ああ。はい。はい。悪くない。ま、調整は必要だけど悪くないな。

高橋英信: 画面が止まって俺は確認ができない。

竹林ユウマ: 今どうすか? もしもし。

高橋英信: ああ。ああ。なるほど。そういうことか。横線だな。

竹林ユウマ: うん。難しいね。うん。こういう、あ、でもいいんじゃない? 悪くないけどな。

高橋英信: お

竹林ユウマ: さん、どう? そう、違う。

安部和音: ふん。違うかも。うん。なんか、あ、ごめん。ちょっと1回さ、そのカーブなくしてくれ。えっと、足だけ残そう。

竹林ユウマ: あ、はい。

安部和音: うん。

02:16:33

安部和音: ちょっと話して。もうちょい話して。ってなった時にえー、あ、やっぱりそうだ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 今パラティノサンズベタバーと比べたんだけど、もうこのくれで、えっと、女性的に見えるってことが今分かったのよ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。このくれでこれ。うん。うん。うん。髪ね。

安部和音: もう足があるだけ。もう足ってちょっとじゃん。うん。これがあるだけで女性的だなって俺感じたから女性的にはちょっと欲しくないんだよね。だから

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。ふん。ふん。ふん。ふん。でかい。でかい。

安部和音: あ、だからま、そのもう足の時点で結構女性的を感じちゃうのがそつかって感じ。ちょっとブランド像とまた離

竹林ユウマ: えと

高橋英信: おこれ

安部和音: これは M いじったバージョンだよね。

竹林ユウマ: M とりだね。うん。

安部和音: M というあ、だからあれかもしれない。ごめん。A のその首入れ同じじゃなくて MU の軽やかさってのが良かった可能性もある。逆にね。

02:18:23

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: はい。

安部和音: から足だけパターンに MU を元々の MU を使うみたいな最後に作った足だけパターンあるじゃん。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。足だけパターン。

安部和音: 最後触ってそれにあ、だから今それか今それああまあそうだね。

竹林ユウマ: これね。うん。

高橋英信: すね。

竹林ユウマ: いや、俺的にはこの髪ならこっちにもつけた方がいいね。なんかバランスが パッと見悪いから。うん。

安部和音: だからパラティーノサンズの原型に重さをつけるのは確かにそうなんだが、女性的にならぬようにするがちょうどいい可能性があるか。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。なるほどね。えっと、

安部和音: で、で、なんか MU はね、結構気に入ってるんだよね。ベタのベタの MU が

竹林ユウマ: ベタ。はい。はい。はい。

高橋英信: ま、丸いよな

竹林ユウマ: ちょっと一旦楽しいないバージョンの間開いてるバージョンやってみます。

安部和音: うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: です。うん。

安部和音: うん。結構結構バランス良くなつ。

02:20:16

竹林ユウマ: いいじゃん。

高橋英信: うん。うん。うん。

安部和音: 結構バランスいいかも。

竹林ユウマ: うん。うん。いいと思います。ま、ただね、ま、デザインする側としては、ま、これは映画で、エゴですけど、やっぱブランドとしてはもうちょい独自性をなんかどっかしらでも足せたいなってのはある。

安部和音: そななんだよね。うん。

竹林ユウマ: ま、これも1個の独自性だけど、もうちょっともううん。

高橋英信: ああ。

安部和音: まあ、正直ロゴに関しては、あの、ロゴ以外がくそかっこいい予定ではあるからさ。ロゴ以外っていうか、ロ、ロゴ以外がめちゃくちゃ男性的かっこよさみたいなところをやっぱ押していくイメージがあるから、これぐらいの中性的でちょっと幼稚な感

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: じってのはバランス、真黒のバランスが取れる気がする。

高橋英信: ます。

竹林ユウマ: ああ。

安部和音: 方を取るってのができるのかどうか分からないんだけど。

竹林ユウマ: うん。ああ。でもそれで言うとロゴはそのブランドデザインに対して忠実に再現される方がいいと思ってて、ま、ロゴだけ使うみたいな場面も絶対出てくるから、ま、その時の印象ベースで考えた方がいいと思う。うん。

安部和音: うん。うん。

02:21:26

安部和音: あ、いや、もうそうなん。

高橋英信: オ

安部和音: うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: だから一旦この周りの例えばレイアウトとかレブとかなんかそういう要素一旦なしと考えてまデザインだけで一旦そのブランドデザインをなんて言うのあーまのパーソナリティみたいなところは忠実に再現した方がいいっすよ多分

安部和音: ま、そなんだよな。

竹林ユウマ: ちょっと待って充電あと10

安部和音: オケー。それちょっとフィグマに置いてくんね。アウトライン。うん。

竹林ユウマ: えと、じゃあここに置き楽しむといや

安部和音: はい。うん。うん。うん。うーん。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: 個人的にはこっち惜しいす。

安部和音: 左下が強え。俺ん中で。

竹林ユウマ: お前そんなうん。いや、俺は造形視点だとやっぱこ、ま、自分で作ったこれが1番なんだけど、この確かにあの嫁に見せた時にイソップっぽいって言われたんだよね。

安部和音: うん。うん。そなんだよね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: そななかっこいいブランドやるつもりないんだよ。

02:23:13

竹林ユウマ: うん、わかる。

安部和音: っていうやっぱね、親しみやすさがね、左下だかな。

竹林ユウマ: めっちゃ難しい。こう

安部和音: で、でね、で、これに、ま、ちょっとやるけど、え

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: ええ。

竹林ユウマ: あああああ。あ、全然。はい。

安部和音: え。

高橋英信: よかった。

竹林ユウマ: うん。こう確かにっていうそう。

高橋英信: 計

安部和音: ああ。

竹林ユウマ: 1回なんか趣味合うかな。

高橋英信: はい。はい。

竹林ユウマ: 最初考えてこ2つがうん。うん。うん。オッケー。俺も作っていい?

安部和音: まあ、なんかパンフとかにしようか、じゃあ。えっと、うん。これあれ、A3にしてく。Aさんじやねえわ。A4にしてくれ。

竹林ユウマ: えっと、4A4。これ4パンを作りますよ。画

安部和音: うん。ま、これをちょっとさ、作、使ってさ。はい。お願いします。あ、片面のえっと
竹林ユウマ: 面ね。

安部和音: A4縦あ、いや、A4の1枚のこれでいい。

02:25:18

竹林ユウマ: オッケー。えっと、考えます。普通に横軸を悪にすればいいのか。縦使いつてこと? 察し察し想で、ちょっと一応

高橋英信: は

安部和音: うん。ま、それでいいや。いや、もうペラー1みたいな。

竹林ユウマ: ページて

高橋英信: それ

安部和音: テキストボックスがあれかも。あの、四角にして折り返しがかっこいいか。

竹林ユウマ: 確率の確率か。他の人どうやってやってんのかわかんない。これか。

安部和音: うん。手作業でやってんだ、これ。

高橋英信: ゴ

安部和音: いや、手折り返しにしてテキストボックスちっちゃくするってやり方が多分あると思う。まあ、いいんだけど。それだね。業してるからさ、お前受けるん。初めて見た。それでやってるやつ。あ、業が普通に入っちゃってるんだ、今。

竹林ユウマ: ほんまや。ちょっと待って。あ、そういうことか。した。

安部和音: 全部の業を消さなきゃいけない。ど、どっち道ちやろうか。

竹林ユウマ: ああ、もかしいな。いや、いい、いい、いい。こういうの AI、AI でやってくんねえかな、こういうの。

02:27:47

安部和音: できるだろ。いつの時代の AI の話だ。GPT 3ターボやん。くんないの? えっととちょっと待つ見てない。

竹林ユウマ: ずい。一旦これでいい。

安部和音: えっと、待ってね。

竹林ユウマ: A 分いよ。分かった。た。

高橋英信: はい。

安部和音: うわ、なんかいい感じのないかなちょっと試しに。でっけえ、でっけえ。ちょっと待って。えぐ、エグ買いそうだ、これ。これを使ってくんない? これを使ってくれない。

竹林ユウマ: これオします。すいません。ラストの時間となってます。

安部和音: あの、ホテルの画像に、あの、それでトリミングでどかしであ

竹林ユウマ: 大丈夫です。

安部和音: もっと下の方で行けない。ああ。はい。はい。あ、なんかちょっと近いかもしんない。

竹林ユウマ: ん。

安部和音: ちょっと近くなってきたかも。全然違うんだけど。もっとレタチをね、バカみたいな感じにしたいんだよな。なんかエヴァンゲリオンみたいなレタッチをこれでやりやつたらちょうどいいんだけど。

02:32:31

安部和音: ていうかこれあれなの?ええ、そんなんでいけるんだ。感情的にはなんかこの雰囲気かな? このこっちの画像の方は近いかな? 立て立ってるばっかりなんだよな。

竹林ユウマ: ちょっと横の画像持ってくるわえっと、どういう系?あー、これにしよう。

安部和音: なんかえっとリファレンスどっかあるんだあ

竹林ユウマ: ですか? ちょっと文章をちょっと減らすね。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: この即興でアウト作るみたいのが一番同じマジで全然わからん。

安部和音: そうだな。これ置いたらどうなる? 僕が言ってるなんかエヴァンゲリオンはこれ俺も分かってないけど、今。

竹林ユウマ: 1回試

高橋英信: はい。はい。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: これ画像だからちょっと取ってくるわ。

高橋英信: はい。

安部和音: あ、んだよな。ネガとかしてみて。これネガ。

竹林ユウマ: いられからうん。どれの目が?え、わかんない。やったことないわ。

安部和音: うん。いや、これのなんかさ、ネガが見てみたくなった。今一瞬できんの? これ画像に対してのネガみたいなできん、できんの? あ、オケー。

02:35:51

竹林ユウマ: はい。本当? ちょっと待って。

安部和音: はい。いや、めっちゃかっこいいんだけど、俺ん中で。いや、感情は近いで。これをこれ可愛いアムにしたらどうなんだろうっていう。オ

竹林ユウマ: ジャ、一旦上高級ムうん。じゃあ、オリジナルアーム。ああ。これがオリジナルアムです。

安部和音: うん。ふふんふんふふんふん。

高橋英信: は

安部和音: あーん。

竹林ユウマ: うん。俺うん。うん。

安部和音: クオリティ的には低く感じる。やっぱりただ感情がちょうどいい。

竹林ユウマ: うん。うん。ま、なんだろうな。寂しさみたいなところかな。よし。

安部和音: なんかぼくない感じが好きなんだよね。やっぱやっぱりやりたいことに対して口ゴがちょっとちよつとずれてるところが寂しくない感じるし、まあなんかそれ寂しさの中に優しさを感じるというかさ。

竹林ユウマ: ほくな。うん。うん。こいつ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: っていうのをロゴで表現できるのがすごいいいなって思ったんだよね。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: やっぱり道具として使う竹林君がま、言ってることはめちゃくちゃ正しいと思うんだけど、あのロゴをクリエイティブの中で一部のパートとして使うことができ

02:38:43

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: るっていうのはなんか俺の中ですごいいいパインチューニングになる。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: お

竹林ユウマ: なるほど。うん。

安部和音: だからこれが例えばこの画像に解けるような感じででも同じような感情を与えるもう少しクオリティの高いもつとか可愛くてクオリティの高いっていうのにならないかなて

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: お

竹林ユウマ: ちょっと待って。ちょっと別パターンを試してみるわ。え、うん。

安部和音: ちなみにパッと見ていくとこれ右と左右と真ん中って何が違うんだっけ? 伸ばしたバージョンみたいな。

高橋英信: お

竹林ユウマ: うん。真ん中はえっと下。

安部和音: 右と真ん中ってこれ何が違う? うん。

竹林ユウマ: この下側をじってないで右はフルでいじってる。橋と髭どっちもいいじってる。

安部和音: はい。はい。はい。うん。ふん。ふん。ふん。ふん。ふん。ふん。時点で真ん中めっちゃかっこいいな。

高橋英信: ではい。

安部和音: てか真ん中めっちゃかっこいいわ。かっこいい気がする。

02:40:35

安部和音: 真ん中が1番クオリティ高く感じるかもしれん。

竹林ユウマ: 真ん中。

安部和音: これがいや、これいいかもな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: ああ、真ん中はいいかもしれん。

竹林ユウマ: これどう?なんか造形じゃない気もしてきてカーニングな気もしてきたんだよ。

安部和音: うん。あ、なんか俺もそれ思った。はい。はい。ああ。あ、なんかめっちゃかっこいい気がする、これ。あ、

竹林ユウマ: あの、造形で言うと、あ、これやっぱりちょっとネガティブに感じる軽やかさがちょっとイメージあんまぐわなくて、だからカーニングで少し余白と遊びを持たせた方が近くなるんじゃねえかって思って今作ってみた。

安部和音: ああ、なるほど。はい、はい、はい、はい。オッケー。で、で、この画像に関して、この1枚絵に関しては今バチっと来たんで、これが背景色、それに置いたらどうなるかって感じか

竹林ユウマ: うん。ああ、はいはいはい。オッケー。それを残りの充電で行けるかけやな。

安部和音: な。火で大丈夫なの?いや、その時間母ちゃんまだ来て大丈夫?

高橋英信: 見てますよ。かちゃんはもう帰ってきてなんかしますよ。

02:42:13

高橋英信: 大丈夫ですよ。

竹林ユウマ: やばい。すぎる。いや、もうね、充電あと

安部和音: あ、マジで? そんなレベル? ああ、めっちゃいいかもしか保存し、保存はした。

竹林ユウマ: 2% ぐらいだから。はい。下下。これいいんじゃない?

安部和音: いや、めっちゃいいかもしかん。

竹林ユウマ: うん。やっぱりあ、個人的な意見。個人的な意見としては造形自体の美しさは保った方がいい。

高橋英信: うん。うん。

安部和音: カーニングラ。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: え、ただ風さんが言ってる軽やかさというか、その子供っぽさも必要ってのは理解できるから、ま、これにっていうなら造形でそれを表現する

安部和音: うん。そうだ。

竹林ユウマ: よりもカーニングというか、その真横で表現する方が性としては近そうな気はしてますね。

安部和音: うん。はい。

高橋英信: うん。うん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: い、めっちゃちょうどいい感じかも。

高橋英信: そう。

安部和音: で、で、今思ったのはロゴをでかく使うよりもちょっとちっちゃめに使うとめっちゃかっこよくなる。

竹林ユウマ: うん。

02:43:18

竹林ユウマ: そうね。さりげなさ的なね。

安部和音: このフォント。うん。このフォントはマジで。あ、でもさっきぐらいのサイズ良かったよ。

竹林ユウマ: 本当。はい。めちゃえやん。

安部和音: このサイズぐらい良かったと思ってるよ、これ。これめっちゃいい気がする。で、別はこういう写真がやっぱ撮れるから。

竹林ユウマ: ちょっと一旦次までの実験としてさ、あの、小さく使う前提ね。小さく使うから、もうちょっとこの髪をコントラストつけたバージョンを作つてみたい。うん。うん。うん。うん。オッケー。オッケー。

安部和音: うん。うん。うん。オッケー。で、ちょっと可愛いをイメージしてもらいたいというか、可愛いというか、今ぐらいのパラティーノの持つ感じ、血に足っていうのはちょっとやっぱり俺的には女性的リッチに感じた感じがするから。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。なるほど。オッケー。うん。ちょっと待つ。ラスト。えっと、これか。こっちもカーニングを。うわあ、間に合うか。

安部和音: うん。あ、なんかポジションマップを俺作ろうかな、そろそろ。

02:44:31

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ちょっと一旦大雑につけるけどえっと髪内バージョ

安部和音: もうちょくしありいや、ありだけど右んじやねえわ。

竹林ユウマ: そう、マジで? うん。うん。

安部和音: え、でも2択だと思うよ。

竹林ユウマ: いや、俺、ま、ちっちゃめに使う前提で透明で見てちょっとサンセリフすぎるって思った。うん。特色が消えすぎる気はすんだよね。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: さつきさつきの時またうん。うん。ああ。ふん。ま、でもクオリティ的には俺的にはもう好みの話になってきたから好みとキャラクターだからここからポジションマップを作ろうかなって思うから。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: ポジションマップっていうのはうん。

安部和音: 今までの共通値でとりあえずとりあえず詫びサビでの俺がもうポジションマップが作れそだからちょっとそれを作るわ。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。ん、あれ。ああ。あ、4証で割つて。

安部和音: うん。分からぬ。それがどういう軸になるのか分からぬけど。ちゃんと詫びサビを読んだあの俺がまた図みたいなのを作るか。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。そ、あれ何を比べるやつ?他のブランドとこのアムブランドをこう比較するみたいなこと。それともなんかこの今まで作ったロゴを

02:46:21

安部和音: ま、ま、何、何かしらの軸を元にポジションマップ作る予定。

竹林ユウマ: 4証現に配置してみたいな。

安部和音: あとま、いや、えっと、やっぱり他の、えっと、他のホテルとのポジションマップ、まあ、なんかちょっと俺がイメージするのがそろそろあれだと思うから

竹林ユウマ: ああ。ああ。うん。はい。はい。そう。うん。

安部和音: 。ず式さよなら。

高橋英信: ああ、さよなら。

安部和音: ま、てかマジですかね。どうでした？

高橋英信: うん。いや、なんかそうなんだよな。そろそろそろそろというか俺がやるなんかこう、ま、意見を言うではあるんだが、それ以上に優馬みたいに手を動かしながら喋るができるいいのになってちょっと思った。うん。そう、そうなんよ。

安部和音: 手は動かさないで口を動かさなきゃいけないんだよ、やっぱり。いや、やっぱりそう。うん。そ、

高橋英信: そう。いや、分かる。言ってる。そう、そうなのは分かる。

安部和音: うん。手は動かさなくていいでもその代わりやっぱり YouTube 見てないとかあるあるじゃん。ま、やっぱ見れる。ま、その本、本はさ、ちょっとさすがに最近忙しそうだからあれだけど、本は俺も日でも読み終えてないとしても YouTube 5分5分とかだからさ、10分10分とかだからさ、まあそういうのは大事だし、それがないとやっぱ喋れないよ。

02:48:18

高橋英信: うん。なんか見もそう。

安部和音: うん。

高橋英信: そう覚えてらんねえんだよな。いや、見た気がするんだよな。

安部和音: どういうこと？ うん。

高橋英信: 1個はなんか2個はあるみたいな話して。

安部和音: でもそのメモリながら見てないとさ、覚えるとかじゃなくてさ、目、メモ持ってやっぱやんないとさ。で、俺一時停止して結局5分の動画が30分かかるみたいな。

高橋英信: うん。

安部和音: だから見といてって言われたら見といたプラスをやったら次喋れるようになるからさ。

高橋英信: うん。

安部和音: まあそれがちょっとディグリみたいのが欲しい。うん。

高橋英信: そっすね。で、えっと、とりあえず俺をその、えっと、ボードに入ってくれるか。

安部和音: ああ、招待してるやん。

高橋英信: 僕をそのボードに入れてもうことってできるか? マジで? 白のしか来てない。

安部和音: うん。で、もう交代するわ。

高橋英信: あ、もう1回来た。

安部和音: うん。まあ、なんだろう。ディグリだね。

高橋英信: オッケーす。うん。

安部和音: リグリートあと例えばこういうミッドセンчуリーについてなんか調べたとかさあると同じ本を読んだんだけど違うところを深ぼってるから話になったりとかするからさ

02:49:56

高橋英信: はい。

安部和音: 例えまこれ大事だったじやん色で差別化してると色じゃないところで差別化してるのが詫びサビとモダニズムの違いとかさそう色しかないんだよね

高橋英信: まあ、単純うん。

安部和音: みたいな話ができたらめつじゃあめちゃくちゃ良くてみたいな。そういう話ができると。

高橋英信: うん。

安部和音: そうそう。まあていうのはそういう、ま、こう喋んなきゃなみたいな感じでちょっともう義務的なあの意味合いでいいからちょっとや次の定例までにやってみるみたいな。

高橋英信: ま、そのなんだろうな、モダニズムって何だろうみたいには読んでてさすがに思うので思ったので、ま、そういう気持ちを大切にしようっていう話ですね。

安部和音: うん。そう。そこで分からないこと全部質問していいし、全部調べていいし。て、てか質問した方がいいわ。俺たちが喋ってる。それ聞いたことない。こういう名出てきた瞬間に喋る。あの、質問すればさ、コメントねえな、このミーティングって思ってもさ、知らないことがあつたらさ、いっぱい喋れるじやん。

高橋英信: あ、そうっすね。はい。うん。

安部和音: で、それで何ですかっていう、それって何ですかっていう入りをすれば間違えてたとしても間違てる前提で教えてくれるわけだから他の人は別に間違えても攻めないみたい。

高橋英信: うん。

安部和音: でもあん時お前聞いてこなかつたじやんて思われるわけじやん。ちつたかぶつちやつて聞いてだから質問ガンガンしてで本で分からることあつたら調べるってやるだけで多分めちゃくちゃ成長すると思うわ。

高橋英信: はい。はい。うん。はい。

安部和音: ジャあそういう感じで本読み終えよう。俺も読み終えないとい。

高橋英信: は4だ。4だけど読み込みが浅いね。

安部和音: 読んだのだからもう調べりや。

高橋英信: ああ、ま、そういうこと。はい。よし。はい。

02:52:31 より後に文字起こしが終了しました

この編集可能な文字起こしはコンピュータが生成したものであり、誤りが含まれている可能性があります。作成後にテキストを変更することもできます。